内閣文庫
和書
類 八七三
號 一一
冊 一四
函 一七二
架

内閣文庫
番號 和 8873
冊數 11 (5)
函號 172 178

禮

恵教院

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會卷之五目録

前朱雀

制度取調
左藏

八幡宮神系　神宮寺
常盤地藏　狐川流
阿弥陀堂　下高良社
石清水　上高良社
細橋　新向橋
志水　正法寺
大荒木森　浮田森
城南社　秋の山
美福門院墓　西行寺
冠石　墓盤梅　鐘木町
墨染桜　城山　桃の名所
放生川　墨染
宿院　梅谷　梅の名所
鳩峯　西行桜
琴塔　竹田
瀧本坊旧跡　淀川
女郎花塚
餌飼地藏　墨染寺
疫神堂　源氏物語旧跡
八幡宮
景清塚
御祭礼場　放生会来由
淀姫社
水車　夜舟場
北向不動院
安樂壽院

仏法寺
瑞光寺
石峯寺 茶碗子
栗栖小野
少将通路
一言寺
長明方丈石
京橋祇場
捲川橋
三室戸寺
茶摘圖
宇治橋
朝日山
源仲 彩家
元政墓
即成就院
小野
下醍醐
笠取山
石田
豊後橋
小幡
宇治山
宇治川
通多茶屋
恵心院
藤森社
昭宣公墳
邦須与一墳
小町水
土醍醐
日野菜師堂
佛國寺
指月
弥陀次郎跡
喜撰嶽
山吹瀑
橋寺
真聖寺
走馬圖
宝塔寺
桓武帝陵
栢の木
醍醐水
重衡塚
御香宮 御香水
六地藏
英彦山万福寺
宇治十帖古跡
播小路橋
離宮神
琴坂

亀石
槙の滝
桂尾山
鎧兜松
點汲圖
鷲峯山金胎寺
兜社
玉川
蟹満寺
一休和尚旧跡
猫里
嘗森
加茂社
山吹
橋姫社
平等院
扇芝
宇治田原
百丈山大福寺
玉水
井手里
涌杜
天神杜
瓶原
海住山寺
清見河原
中宿芝
浮舟塚
鳳凰堂
駒繋松
巻栗焼栗林
久世鷺坂
諸兄公旧跡
光明山
北野神童寺
經喜塚
杉杜
茶仁塚
笠置寺
蛍狩
猫飼塚
殆殿
縣社
信西入道墓
椎尾山
玉井寺
高倉宮霊廟
薪酬恩菴
木津川
國分寺
流圓
後醍醐帝皇居

やくそくそうりの下向
ハ破魔弓毛鑓
ゐどの武者所求
て土産とろハ神功
皇后三韓を退治
あるて御凱陣
はしくの遺
風あるべし

栗栖天満宮

石清水
流の
絶せぬ
大阪
淀川
宮城地蔵

八幡
神宮寺
相手
方丈
地蔵

八幡
御旅所疫神社
阿弥陀堂

新後撰
やくさゝ
さゝり
神の
めぐ
ゝそ

国立公文書館
National Archives of Japan

石清水八幡宮

国立公文書館
National Archives of Japan

石清水正八幡宮は王城の南にして行程四里綴喜郡男山鳩嶺に御鎮座あり

新続古今 やはた山あとたれ初しみしめの内に猶万代と松風ぞ吹く 後鳥羽院

続後撰 るかてらせよしふかゝるに男山あふく峯よりいつる月影 後久我太政大臣

本社は三坐にして誉田天皇 日本紀に足仲彦天皇又應神天皇と号す足仲彦天皇第四の皇子にして御母は神功皇后之御在位四十一年聖壽一百 玉依姫 東の間に鎮坐し給ふ鸕鷀草葺不合尊の妃神武天皇の御母なり 神功皇后 西の間に鎮坐し給ふ開化天皇の曾孫にして氣長宿祢の女なり幼より聡明睿智貌容壯麗なり仲哀天皇の皇后三韓を平て筑紫にありて應神帝を生給ふ在位六十九年聖壽一百歳 當山は御鎮坐は貞觀二年六月十五日和州大安寺の沙門行教和尚神殿を造営しけり行教は筑紫宇佐八幡宮に一夏九旬の間参籠して昼は大乗の経を讀夜は真言を誦して法楽せしに八幡宮御託宣あり我王城の近に遷坐して鳳闕を守護し國家を安泰ならしめんとのたまひ兵夜行教の三衣に阿弥陀の三尊現じ給ふ沙門都に上って此由を奏聞しければ朝廷大に悦せ給ひ急に此山に神殿を営て永く崇敬し給ふなり八幡の神號は筑紫宮崎験松の下に八流の幡降る赤幡四流白幡四流則此所に社を建て正八幡大菩薩と崇奉る又一説には和氣清麿に託して我は誉田八幡丸と名くるに故にありなど當社を行教の勧請より両部にして光を和らけ神を塵と同じふしぬるは八あれど今幣使の御しくは唯一の神道にて法事数行はせる事とぞ一鳥居 山下宮院にあり八幡宮の額は佐理卿の筆なり旧額しれれど松花堂是を補ふ

二鳥井 七曲の三鳥居 大師堂の前にあり石柱に銘を彫正保二年正月従四位下行信濃守大江姓永井氏尚政是を建るとあり

若宮 祭る所 仁徳天皇 若姫宮 姫を祭る 宇禮姫 是を祀 水若宮 宇治の皇子を祭る 仁徳帝の御弟なり

上高良 武内大臣を祭る 六朝の臣下にして壽三百十餘歳 下高良 藤大臣連保を祭る 神號を高良玉垂命といふ 干満の両顆を以て奉行し給ふ故に石清水 本殿の巽の半腹にあり 傍に石清水權現社あり

続古今 松をおもひ又を幕むとも石清水ありけりしとくつをくすめらん 貫之

新拾 神のちかひ やうけとも乎石清水のすゑもへむかしそつくさし 為家

橘樹 外殿の西の回廊の外にあり 判官正成祈願のため栽植し 前にあり 納向橘 東回廊の外にあり 楠 及今此楠の残れり希代の大木なり 楠の傍にあり 行教和尚の弟子

安宗別當社 安宗の霊を祭る 猿尾社 本殿の西六四にあり

大塔 安置 大日多宝の二尊を琴塔 毘沙門天を安置す 軒の四方に琴を掛けて風琴の代とす 太閤秀吉公 玉令を以て 太子堂 此堂あるを以て太子坂といふ 南面仏の

像阿弥陀佛を安ず 薬師堂 護国寺といふ當社御鎮座以前の本尊也 開基は詳ならずとも本尊は立像の薬師 阿弥陀堂

安置す 八幡宮外殿の元三大師堂 大師の御影は御門の君の御作 愛染堂 盛福院といふ本尊を安置す

阿弥陀を安置す 比叡山にあり 愛染明王を安置す

疫神堂 一の鳥居の南廊下の内にあり此所八幡宮御旅所之疫神は正月十九日 一日の勅使之延喜式に曰山城と摂津の堺にまつりしとあり世人
正月十八日より十九日まで當山に群参して其年の疫難を攘ふとなり土産に蘇民将来の札同釘竹破魔弓毛鑓等を求めて家に収め邪鬼を退るなり

本地堂 疫神堂の西に隣る極楽寺と號す本尊は阿弥陀佛脇士は観音勢至を安置す此三尊は本殿の御正躰なり堂前の鐵燈籠は豊臣秀頼公の寄附なり

細橋 八幡住吉の二神影向ありし所なり石を布て橋の形とす

宮本坊 行教院と号す此坊は伊勢外宮遷座の所なり

瀧本坊 石清水の傍にあり松花堂惺々翁は此坊の人にして書画をよくし今に名高し

泉坊あり

開山堂 行教和尚の像 本尊は大師の像を安置す 昭乗の住房なり文禄慶長の頃の像は弘法大師の真筆なり

僧正禅助建立

景清塚 平家の侍士悪七兵衛景清は君の讐を報んとて将軍頼朝卿當山参詣の折を伺しといふ此所にて

稲荷社 小鍛冶宗近此所に籠て名剱を鍛しとなり

大乗院 宿院科手の間にあり當山の神宮寺なり本尊は千手観音を安置す神殿を神功皇后のまつり給ふ愛染明王を安置す方丈の開基は興聖菩薩なり

足立寺 本殿の西にあり昔し称徳天皇弓削道鏡に帝位を譲らんとありし時和気清丸を勅使として宇佐八幡宮に祈り給ひ神慮をうかゞひしに道鏡怒りて清丸の二つの足を切り給ひしかども清丸上洛して此旨を奏せられ道鏡を流し給ふ清丸は船に乗て宇佐の後を帰る時叢の中より猪来り清丸を負ふて神殿に至る其後社壇より五色の小蛇出て清丸が腫を舐しに二ツの足もとのごとく生出しといふ清丸帰洛の後男山に伽藍を建て弥勒佛を安置し足立寺と號す

三善法寺 當山の社務にして三ヶ寺あり善法寺新善法寺 田中と云是等は皆いにしへ武内大臣の後胤にして祀職なり

五瀧泉 石清水 藤井 瀧井 赤井 筆之真所 圖にあり

放生會 八月十五日なり人皇四十四代元正天皇御宇養老四年
九月に征夷の事ありて大隅日向の両国の大賊逆乱を故に内裏より勅使を宇佐八幡宮に御祈誓ありて其宮の祢宜辛嶋勝波豆米は神軍を引率して此国に征して凶徒を亡しぬ其後八幡の御託宣に此度は合戦にて多くの殺生をなせし間殺生を放てと告させ給ひしより神勅によりてこれぞ放生の始なり

扶桑記にいはく後三條院延久二年八月十五日より上卿六府の輩をして勅使とせられ殿上人以下なども供奉に准じて神輿の遷幸に従ひ奉るなり

放生川 八月十六日放生供養ありて高橋又橋を安居橋といふ此時放生亭より魚鳥を放しける

新古今
男山秋のなかばの契りかな 神せにかよふ月の鏡を 家隆

臨時祭 二月中午日なり 天慶五年より始る 石清水かんしのま川

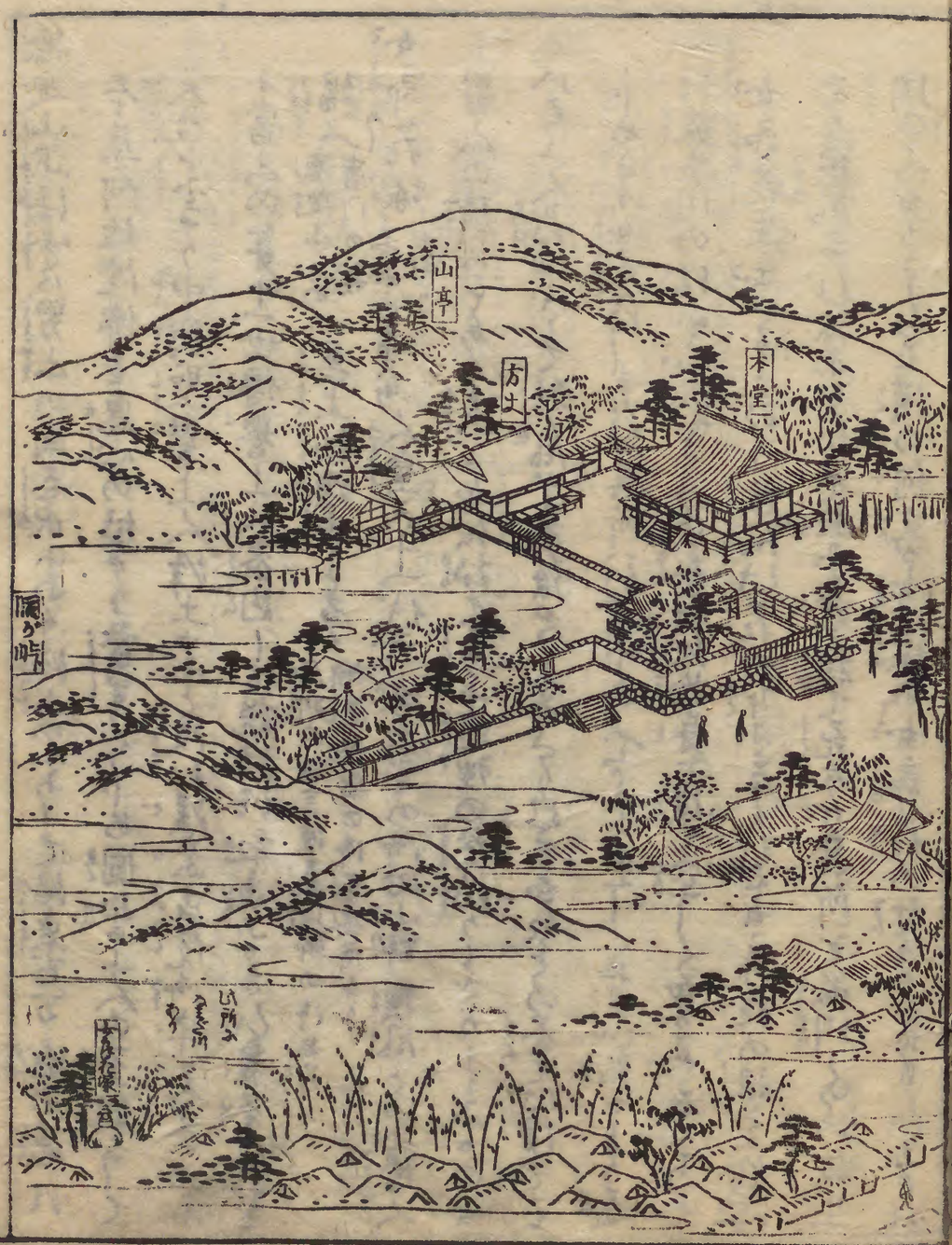
新勅
ありもせし衣にをけるさく竹のよ人のかざしにさくらなれ 定家

餌飼地蔵 小野堂の北之金昌寺の門にあり 放生川へ餌をあたへ此本尊を 若宮八幡 科手に 常盤地蔵 是より八町ほど八幡の神域なり

八幡社放生会之
毎年八月十五日の
未明より宇院社
幸ありそは日七ツ時
還幸あつて十六日
ハ放生川の汀へ
社僧出そろひて
の魚鳥放ち
くまなく此日ハ
遠近より諸人
群集し

宿院のかくろ
ハ芝居放下
師いろくろ
ハ食出て天地
ゐく市をうたハ
社家のあぐみ
うるべし

志水正法寺



国立公文書館
National Archives of Japan

德迎山正法寺は男山の南志水にあり浮土宗にして浄東百万遍に属し
本尊阿弥陀佛を恵心の作なり當寺は圓誓上人の草創にして
天台宗なり中興聖譽上人浄土宗に改む後奈良院御宇天文十年
に當山の第十一世傳譽上人桑田に説法し給ふ帰京して新を
場に唐門の額 徳迎山とあり 是上勅願寺とする 尾州大納言源義直卿の御母公
女郎花塚 志水の南入町 人皇五十一代平城天皇の御時小野獵風といふ優人
男山の麓にあり京に女房ありて男に連理の契深くぶりしかの女
八くさ人易ゆくて獵風が手紙をつかはしたるに答てしほどた
じめる女房はまたが其所へ行かんとて人々に知せずして逐
に放生川の堰に投身して死す獵風も是を聞て遂
女郎花生出るしかり獵風此花の根に風情
あり頻風さしなおれて共に身を投て死す女郎花の恨る風情
川の上にさしなびく漢の何文が女郎塚に女郎花の生るも拘りにて
古今の序にも男山にたむけとよひ出て女郎花一時盛りなりけり

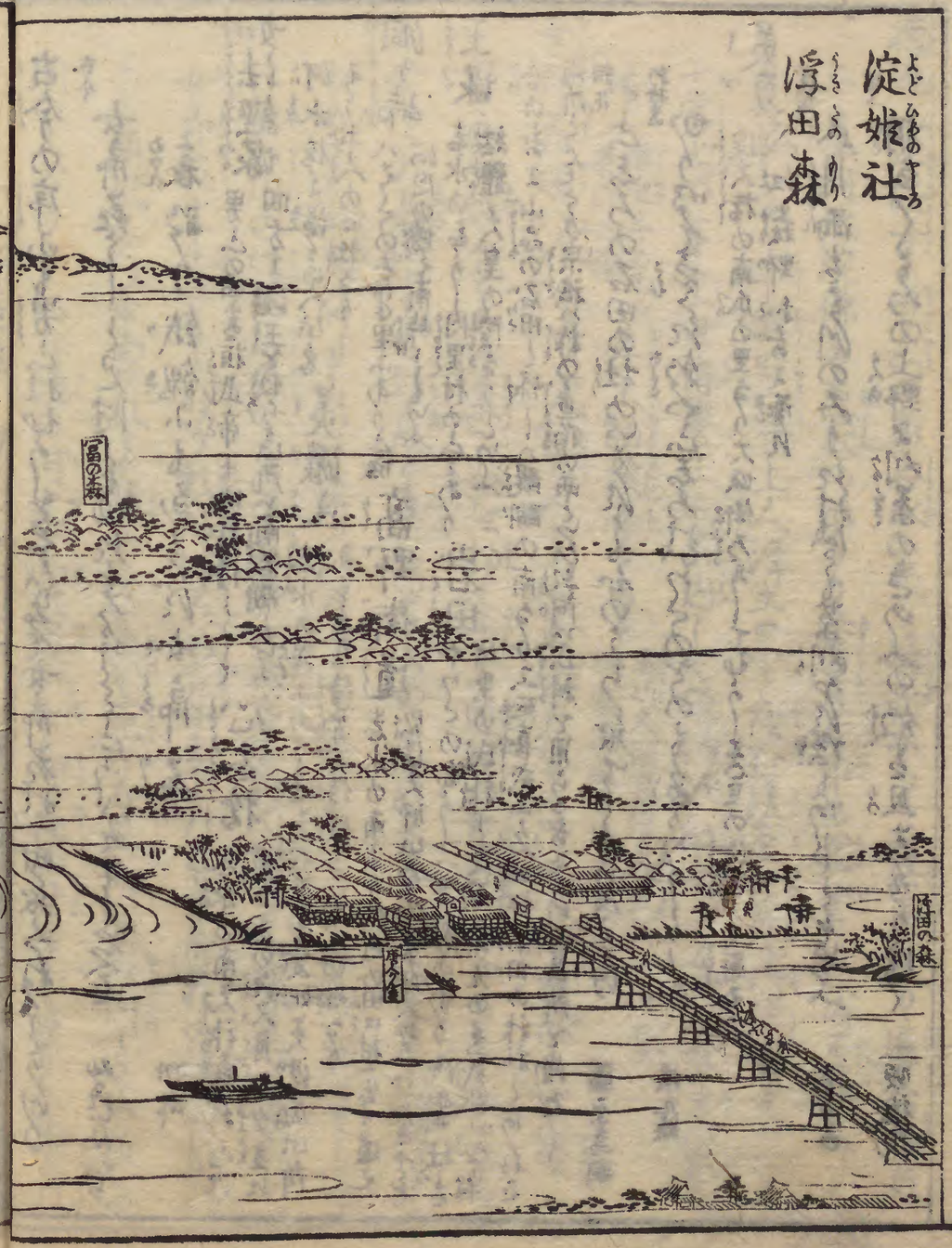
古今 女郎花さくやこの度はかたがほの秋の野風に心をぞ寄る 班昭

女郎花 夜野ゆく鐵魂にもるるしたに女郎花

如法經塚 男山の西に桓武帝王城結護しまして心を搖 志水の南天神森に紀氏に
四方に經王を埋る山所を南岩藏とも
河水搖る流るゆへ此名 美濃山 志水の巽にあり侍従宮小侍従も此人の妹なり
あり土人の口碑なり
洞ケ峠 八くさの西北里にあり山塚 高野街道 志水の南うりの西の田に村へ出る道
河内の堺に南峠とも
王塚 志水の南うり内里村の山にあり 岩田やうとの一里塚にあり御亜社を
継體天人皇の陵なり
合の御山品の石田と称し醍醐の南うり延喜式に久世郡石田の祢社とのれた
兩所とも宗祇の作の道猶の西にひ桂河に山科と用るにふれて其所と為し
詞花
山ちかの石田の杜のいそがもの秋の夕ぐれ
彰考館
のりのそこなれ鶴や山ちかのこのもの色のうつりゆくらん 藤原為嗣
美豆 淀大橋の南瓜の里より大坂街道なり 美豆の御牧とて厩あり 後拾遺 入江森野和泉の国歌
入江 森野 和泉の国歌
八月雨ちかくのみまれはつもるなり夕ぐれ 後十 さがみ
胡蝶くちかの上野より山茶のきのくの紅葉 順徳院

淀姫社

浮田森



淀
拾遺
いつくとふ
四そり
らん
かくく
きん
よとの
海りの
まこと
夜
うの
きん
慶見
淀の水車へむし
よりあつて耕作乃
ためふを秀吉公の
室淀殿さいはい
めしやうの城中乃
用とうん

淀川を五畿内第一の大河みて古國は水あふれ帰舟 山城 近江 河内 伊賀 丹波 摂津

河水をはるかに流れくだるこのふるびわく雑渡津へゆきうへ舟をこぎ

くるたくさんもおく城郭の汗みを水車ありて波ふ流し翻々と

めぐる領主の茶亭橋上のゆきうく美人系遠々くしく笑くるとく

いつくるすれ　所を鯉の名産あり　城多く公用の故ゆ常ハ遊猟公禁

新古

ひりくくくくくくくまは本おるて淀の河流れ波ふるる　公衡

風雅

五月雨ふ岸は青柳枝ひちて捕を渡るとくの河ふ　俊成

玉葉

さを掉も及ばぬ水ふ住をて下る淀の河ふ孫　冬俊

淀の大渡いみくへを本津川淀牧の西くり小ふ流を宇治川ふ合くし舟渡くあり

さを波ふ今のごくく本津川を南へ通ぜ八秀吉公の淀制作ふり

大橋　本津川のまくりくる橋くし小橋　宇治川伏見の澤等の下流ふくる

長サ百四十間あり　くくり長サ七十間城郭造美の河

りけ初くくくり

淀姫のやくくろを小橋の西ふあり　神いこ坐みて中央い淀姫神

えのくくの間千親内供ワ　若宮を本社の西ふあり多宝塔ふい大日如来ふ安

西の間天神

亟ふ當社を千観法師の勅請ふり此所の毒ふ神ふ伝ふ例祭ハ九月

廿三日神輿一基あり　宮の渡くを當社の多居前ふり桂川れ為金下橋

の小船へ舟くくをり唐人屋本ふくふい胡鮮人

来朝のくくを大坂ふり河舟ふて　天神口　蔵神流宴へ　船ふ乗りくを天満宮の社あり

少くくり此所ふり塗地ふ成り

大荒木杜いくくくくふあくくくを

古今

大河くくくの杜の下ふ老ぬを駒くを　後撰　読人しらず

後撰

大荒木の杜ふ草くくや成ふくくくふ来てとふ人もあ　忠岑

新拾

郭公きくくくくて大河くくくの杜ふて夏の中くくふくくくく　信明

伊勢　向宮　小橋の西ふあり天照を神とする此所

浮浪ふり洪水の時と渡くくふ

浮田木林　孫合せ　和歌多くし渡人考あるべ

続古

くくくくけてやみふくを金　人丸

あまてくのるをと浮田れ繁ふ住ふ　為実

新後撰

紅葉ふよくくを田れをくれむくくくを　重氏

続千

下草ふくくくぬふをくる大河くくくの杜れ浮田ふ早苗くくふり　津守国通

竹田
北向不動院
西行寺
城南神社

久米之丸

小枝橋

城南社

八幡社

秋の山

下ら羽

月見池

利盤堂

西行寺

西行橋

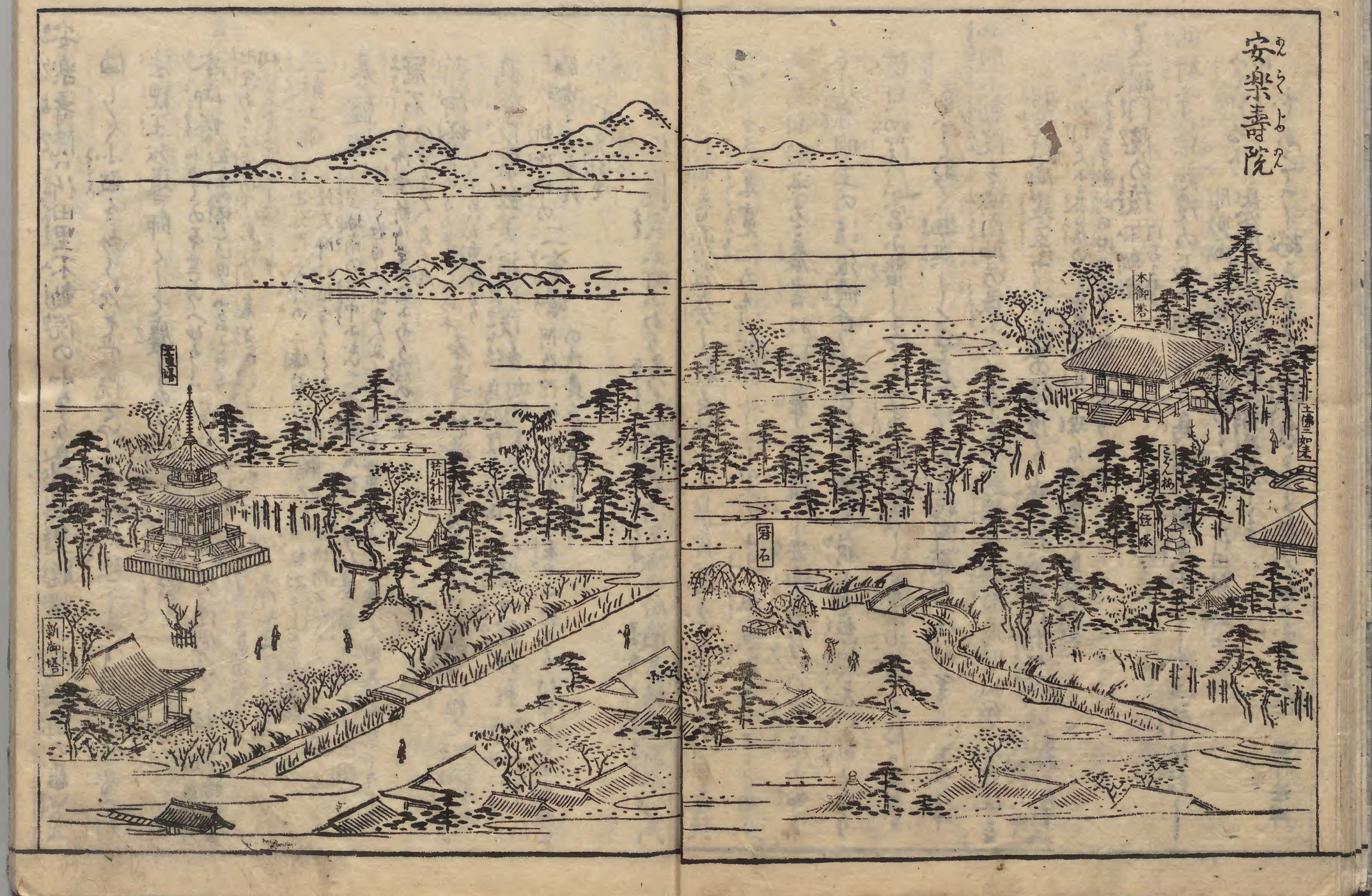
茶所

観音堂

大師堂

国立公文書館
National Archives of Japan

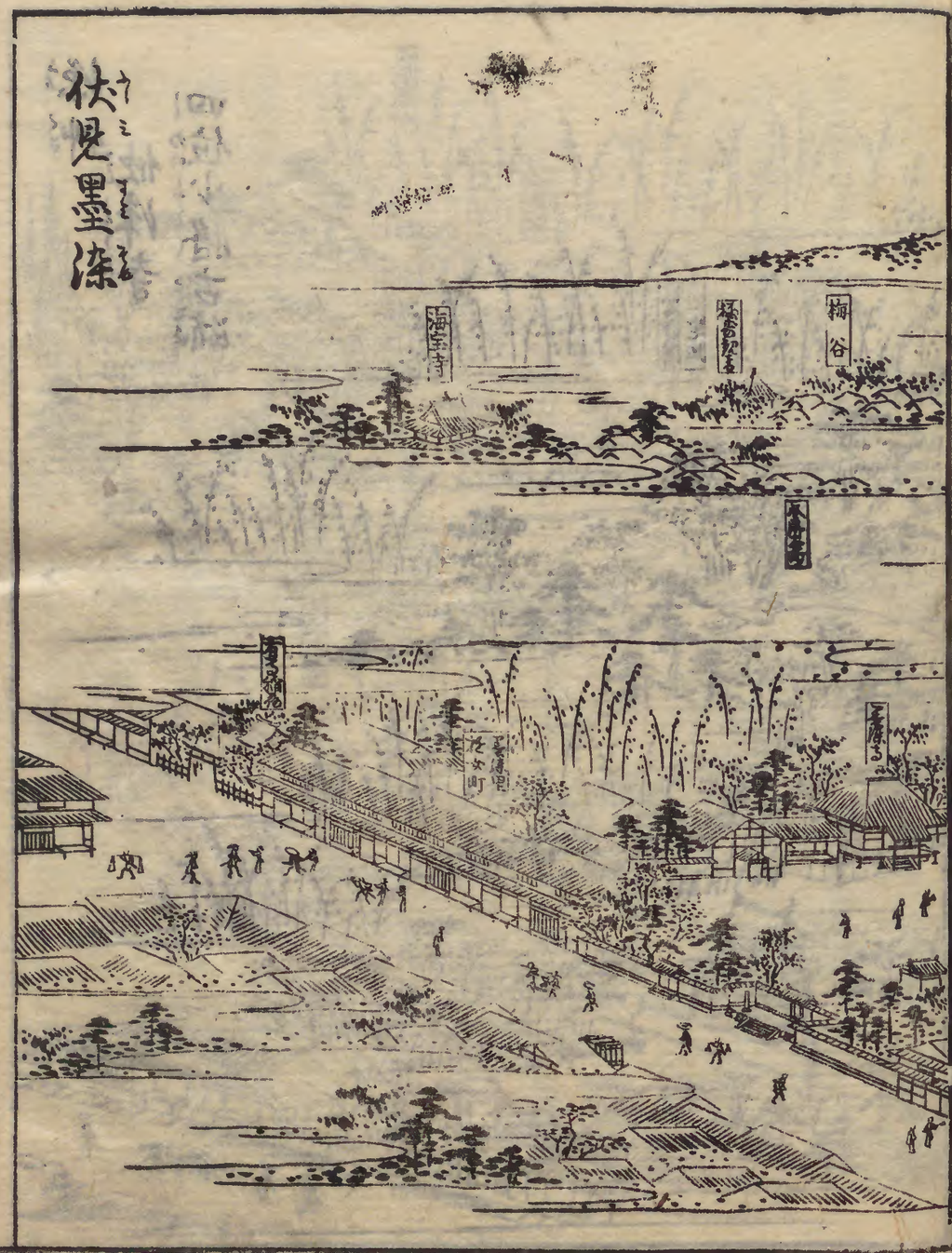
芹川里を淀の東北半里ふあり
たんどあり〜こゝむ〜へ五里ふ川あり天子遊猟の地なりて行幸
故ふるこゝ今ハ民村とありて三人の根芹生ん
後撰 仁和帝門院藤原の御時の例ふて芹川ふ
行幸し給ふるこゝ
さのの山ゆゝ絶ゆ芹川の古代の古道沿ふ行平
新続古 家隆
雲くれこゝ氏の古ゝ今て逢芹川のふ家橋ふん
続古 読人しらず
けさたふもよ絶こゝあくとれ芹川や竹田のさゝ人ふ立ふ
城南神のやしろを芹川のふあり 伊勢 石清水 加茂 松尾 平野 稲荷 春日の七社と云ふ
八幡宮ハ森の東ふあり 例祭ハ九月廿日 下鳥羽塔の嶽 竹田の氏神
城南離宮を鳥羽上皇寛治元年ふ造営ありて遷ゆ仙居あり 旧地を芹川の
ふよりて竹田里を限りて所の南ふよ門あり殿ハ東面あり門前ハ鳥羽街道
ふりて淀ふ通ふ今の道ハ後世作るあり所の地多く田の字しる
北殿南殿田中殿馬場殿車殿等の名あり池の廣を南ふ八町
東西六町ふて蒼海紙摸して中ふ島紙作り蓬莱ふ紙築ハ巖を
琴舟を浮て帆を飛し烟浪渺々と掉を飄して碇を下し春を花れ
陰みて月卿雲客奏し秋を池水ふ月紙浮く客秀歌を吟じ
上皇を元来寛仁の御位源ふして里人ふ牛車紙永ゆ〜しく
又鳥羽殿ふを宸書れ法華紙修せ〜むされて法皇崩じて怨保元れ乱とあり
て孔雀明王の法紙修せ〜むされて法皇崩じて怨保元れ乱とあり
後白河の院ハ宮ふ塾し生まれ沢ふ沢ふ芝廢して家ふ田埜ふ形ふ
新続古 園位法師
るふとおく物悲しく花ふんけるる名ハ田れ面の秋れ雲
小向不動院を城南神の良ふあり本尊不動明王ハ興教大師れ作ふ造田院を
鳥羽院れ御建立ふて王城の鎮護ふ寶祚延長れ勅願所ふ興教大師
の毘沙門天ふ桑絃の曇遮生の珠紙威徳ふ鳥羽上皇ふ
離り不動尊影刻の附御貢ふ
美福門院の陵 不動院 門あり
西行寺ハ不動院の小西側ふあり鳥羽の離宮あり〜時ハ所に住〜
宅地あり 月見池 物髪塔 宝のまん ふあり竹田村の郷士
長谷川氏ハ西行法師れ苗孫ふ
新古
ゆ〜あこゝの〜桜さくりるる我者をうゝ花ゆ人ハ折ふあれ 西行法師

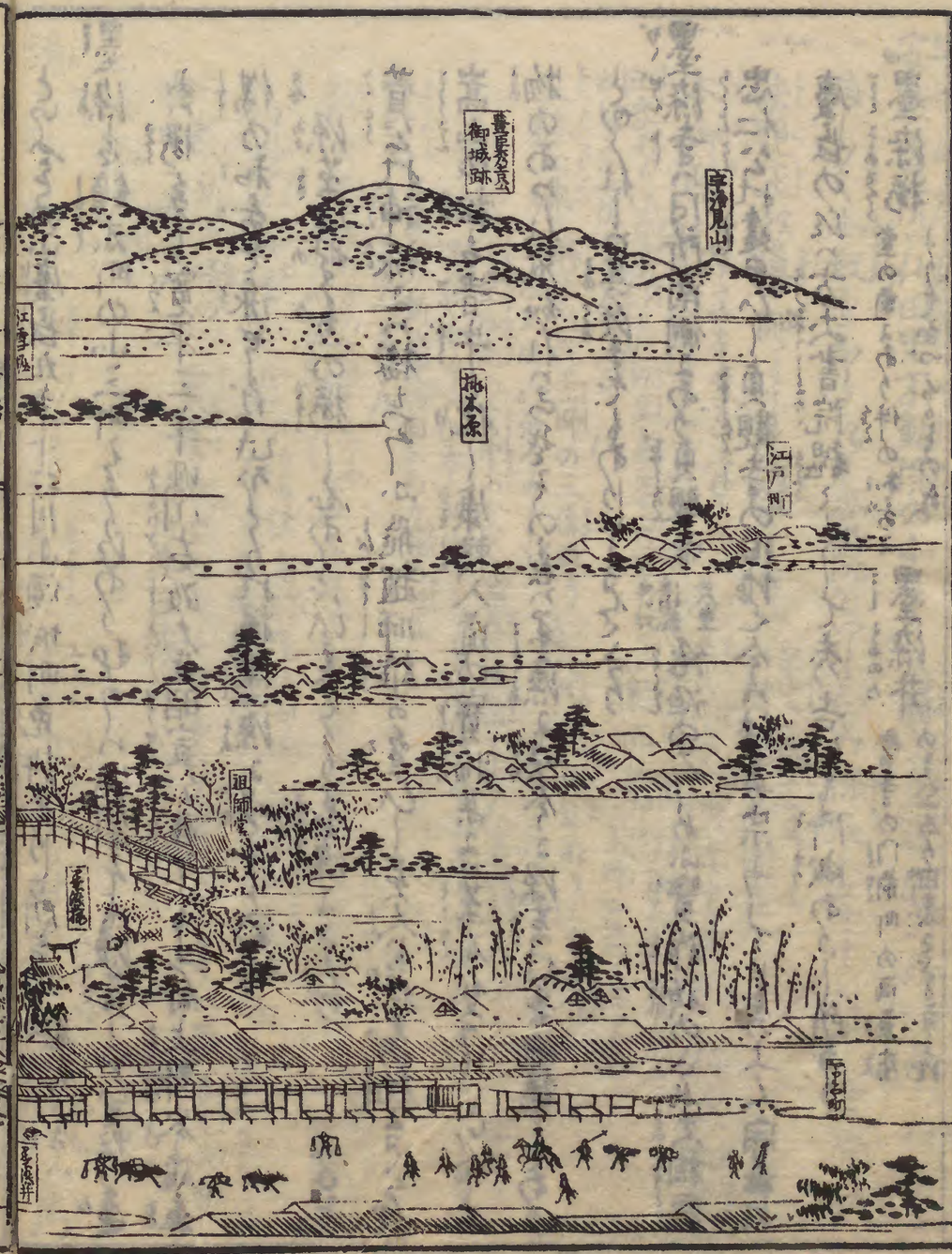


国立公文書館
National Archives of Japan

安楽寿院は竹田里不動院の小路鳥羽上皇脱躧の後城南の離宮なり
はしめ小殿をかまへて當院といふ　宗旨は真言なり
法親王孤導師として慶讃の人　古義新義ともに修学
本御塔　小のくの本堂をいふ　本尊は卍字阿弥陀佛と称し尊像の胸面に
五重の塔をいふ　卍字ある堂の下なる法皇養生の法華経と薬師堂　行基菩薩の作なり
収むる所なり當院の寺鎮なり　薬師如来と安置
三躰土佛　釋迦弥陀薬師の三像なり　五輪塔　無銘なり上皇如法経
弘法大師の作なりとぞ　所に収らる
碁盤梅　上皇城南の宮中に於て圍碁を禁じ碁盤を集めて樹下に
埋めさせ給ふ　碁を禁じ給ふ事は當院に今ふるまひて圍碁を禁じ給ふなり
冠石　本御堂新御堂の間にあり冠の形なり
新御塔　南の方の本堂をいふ　本尊は地蔵菩薩にして定朝の作なり　英猛院の
てぐめの五重塔なり　御念持佛
鳥羽院震殿　美福門院新　鳥羽院の女御八條女院は新　英福門院の
近衛院の御母なり　佛なり
三重の新御塔の一二重塔　阿弥陀佛を安置　英日の作なりは塔は豊臣秀頼公
脇堂に安置　の御建立なり
鎮守　荒神
鐘　本町に竹田巽五町にある秀吉公伏見御在城の時渡唐掃部前京人
とうとうの小慶長九年十二月小領城町免許ありし所なり　今は荒廃に及ぶ
墨染の鐘　本町の小三町とのうちにあり　今は年経て
みの橋　多く寛平三年堀川右政大臣昭宣公薨しの時上野岑雄表
傷の和歌を詠ぜしにより橋墨染と唄しとなり
源茅の野の亀の橋しるあるべしまことに
菅公は神詠の梅もつて小飛趙師雄の夢ひ美人に接せの枕とせんこと
嵩山の松を青牛と化し康頼入道の寶物集に茅本むすびしこと
物のあはれ知れる人をその表に墨染と唄今は源茅は墨染橋とあり
とかくしに其所までもありしとぞ
墨染寺　旧所南側にあり貞観帝　清和　天皇　陽成のとぢめに寶祚祈のため大相國
忠仁公は建のひし貞観寺の旧地と今は法華宗にして日秀上人開基に
慶長の比方丈書院襖にしして秀吉公も御成あり所なり
墨染橋　堂の前にあり伴の和歌　墨染井　當寺の門前町の西東店
のほとりにあり由来さだかなる

伏見墨染





源仲俊浄寺

四位少將古蹟

依浄寺ハ墨染の南ふあり浄土宗ふして本尊ふハ阿弥陀佛 弘安元年造立

聖徳太子ハいみ〳〵へ源州お将の墓宅なり 寺記ふ曰四位少将源茂光卿の長子ふして おね義宜卿と号

十七の時 弘仁三年三月十七日ふ所ふ死ス お将の塚小野小町の塚 堂のうしろ

墨染井 此の井ふ少将かよひ道 百姓のうしろ通る 小町の宅小野庄

犬塚の塚 所沢あるこの山道 通り

預ひすがつ 源ふ所ふ 清水 七瀬川 屈墳 ふあり

竹ヶ下道 竹の下ふ分る

源茂光竹の下ふ分る

藤杜やしろハ墨染ふ小ふあり本殿ハ中央ふ舎人親王ふ

西ハ伊豫親王ふ

舎人親王ハ早良親王

舎人親王ハ天武天皇の皇子ふして天平寶字二年ふ追尊ス崇ふ盡敬

皇帝と號ス

日本記を撰ス

走馬ヶ原ハ光仁帝ハ沛宇天應元年ふ異國の蒙古日本ふ攻来ル

攻へ来ルしを天皇第二の皇子早良親王を大将軍ス退治ありしに

宣旨を奉り親王當社ふ祈誓して五月五日ふ出陣ス神威いちぢるく忽暴

風大ふ吹来り蒙古ハ軍船ふくだけ亡ひうせぬ 吉例ふよりて毎年軍陣

のハ粧を改天下平安ハ祷ス 當社を弓兵政所ハ六ヶ所 所謂ふくろ〳〵ハ

旗塚 本社の西ふあり 神功皇后ふ韓 蒙古塚 當社 敵の中ふ七つあり 今 夷賊退治の後軍将の

退治の後旗を立て埋め 埋て祈威を 力石 祭日ふハ老人の人集りて ふ

源州野ハ藤ヶ森の北ふあり ハ大亀石 ハ 田里南ハ墨染ふ稲荷

と唱ふ 欽明天皇ハ 毎年化人来て君の

秦の大津ふ 求ふ 補佐ス 天下安泰ふ有 若

後ハ曹司ふ 客殿圖して 源草里ふ住ス 是

玄連て朝覲ス 天皇踐祚の時大藏卿ふ住ス 四夷鎮ふ 源

ス日本記ふ 桓武天皇の陵ハ東の山本谷口ふ所 車

塚ハ天皇ハ沛車 埋ス所 鎮守社 霞ヶ谷 霧ヶ谷

深草天皇の建給ひし嘉祥寺も今は嘉祥寺畑と號て字にのみのこれるの
塔は元慶八年に建られて近江の国米百五十六斛丹波の国米二百七十
九斛に貞観錢十二貫文勅して寺附ありき三代實録にみえたり仁明
帝の陵同女御貞子の墓あるハ左大臣冬嗣公の別業大納言時継卿の山
荘真幡寸社拝志寺大日寺後深草院の陵昭宣公の営みし極楽寺も
今ハ里の名となりて遺りぬ深草の郷中ハ高貴の別荘名賢の古
廟霊佛の寺院かぞへ尽しがたし千載のむかしこそあれ村老の口
碑にのこる聴ぬ桑田碧海須臾に改るとハかゝる事をいふなるべし

新古　深艸の里の月影さびしさも住こしまゝの野べの秋風　通具

續古　いつしかと住けん人の跡絶て積れば雪乃深草の里　為氏

續千　深草や竒の籬はとれ住て荒たる里に衣うつなり　雅経

鶉の床は深草野の叢に巣多くむすびて（此所に鶉の床といふ所一所あり作れるハ後世好事者のなせる事なるべし）
むかしより鶉の名所にして歌ハ此境に儔れとりしこそ都下の詞客中秋
の頃さそひあひて笛鼓携聞出して鶉ハあれたる野に啼ものとて鶉鳴く
なれバ鶉の床も共ありて名のこるなるべし　ぬりかし里とよめり其の深草ハ荒て鶉なくなれり
深草に鶉を添合とするハ此るその作例なし

千載　夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　俊成
此歌ある人難じて曰秋風そぞろ寒身にしみてとあるハ
俊成曰これいろく身に秋風の身にしむよしを詠ひてハ仕る曲なし鶉となくありて内
風も身にしみて鳴くそてハさるまなりしかされかしと云人の聴を
消して退しとなり

續古　深草の山のすそ野の浅ちふに夕風さむみ鶉鳴なり　寂超法師

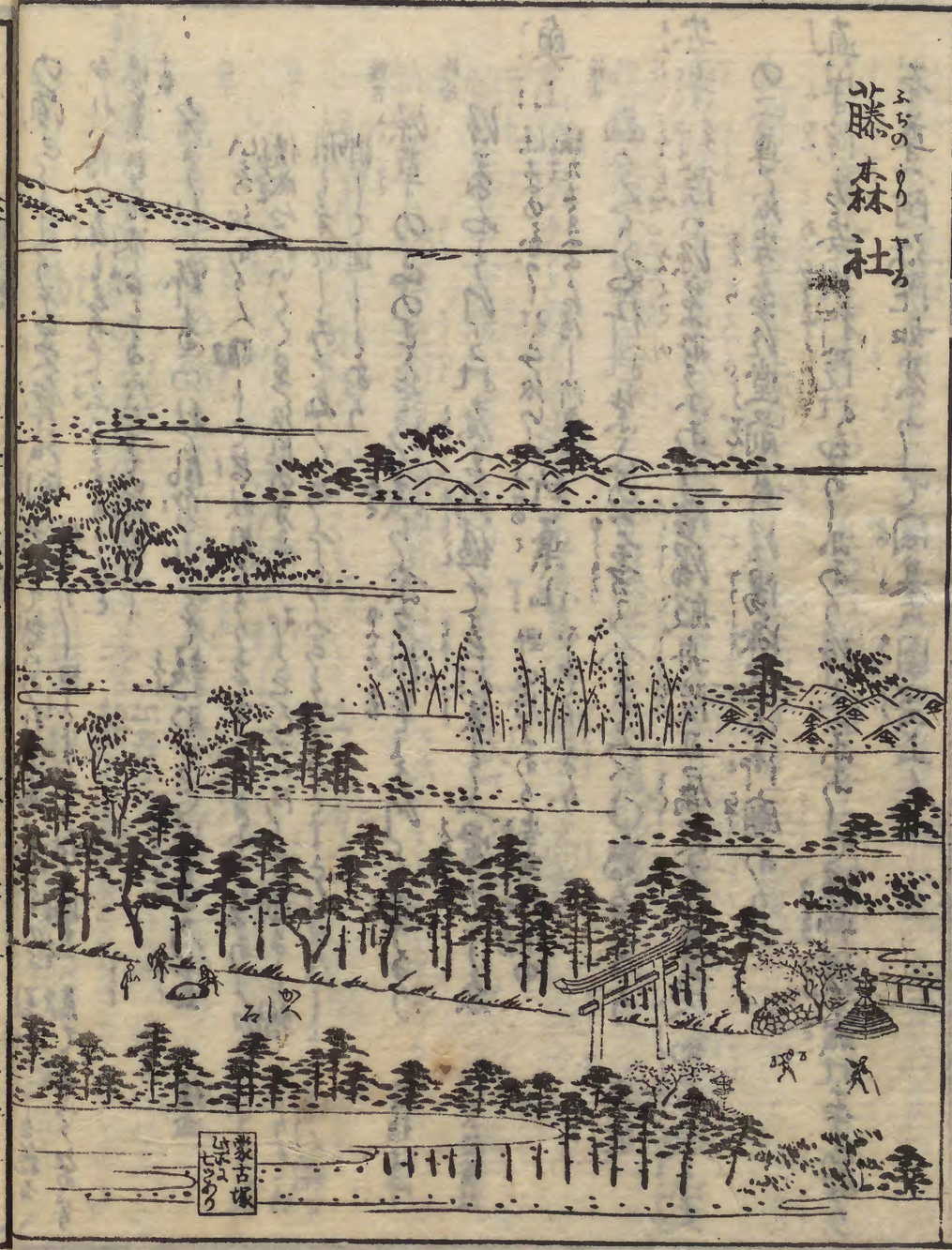
新拾　深草やうつらの床も跡絶て春の里とふ鶯の一声　後京極摂政

奥山　深草の東にあり竹葉山　野の内にあり安楽行院の
猿丸太夫の住し所なり

續古　ぬかぐさや竹の葉山のおのづからみそぎの鶉なくなり　家隆

安楽行院は深草野にあり昔般舟院に屬せる本尊ハ不動尊歓喜天
の二尊を安置し堂前にハ後陽成院の御廟あり
真宗院も安楽行院の北にあり淨土宗にして深艸流義の本山なり
本尊ハ阿弥陀如来にして開基ハ円空上人也

藤森社



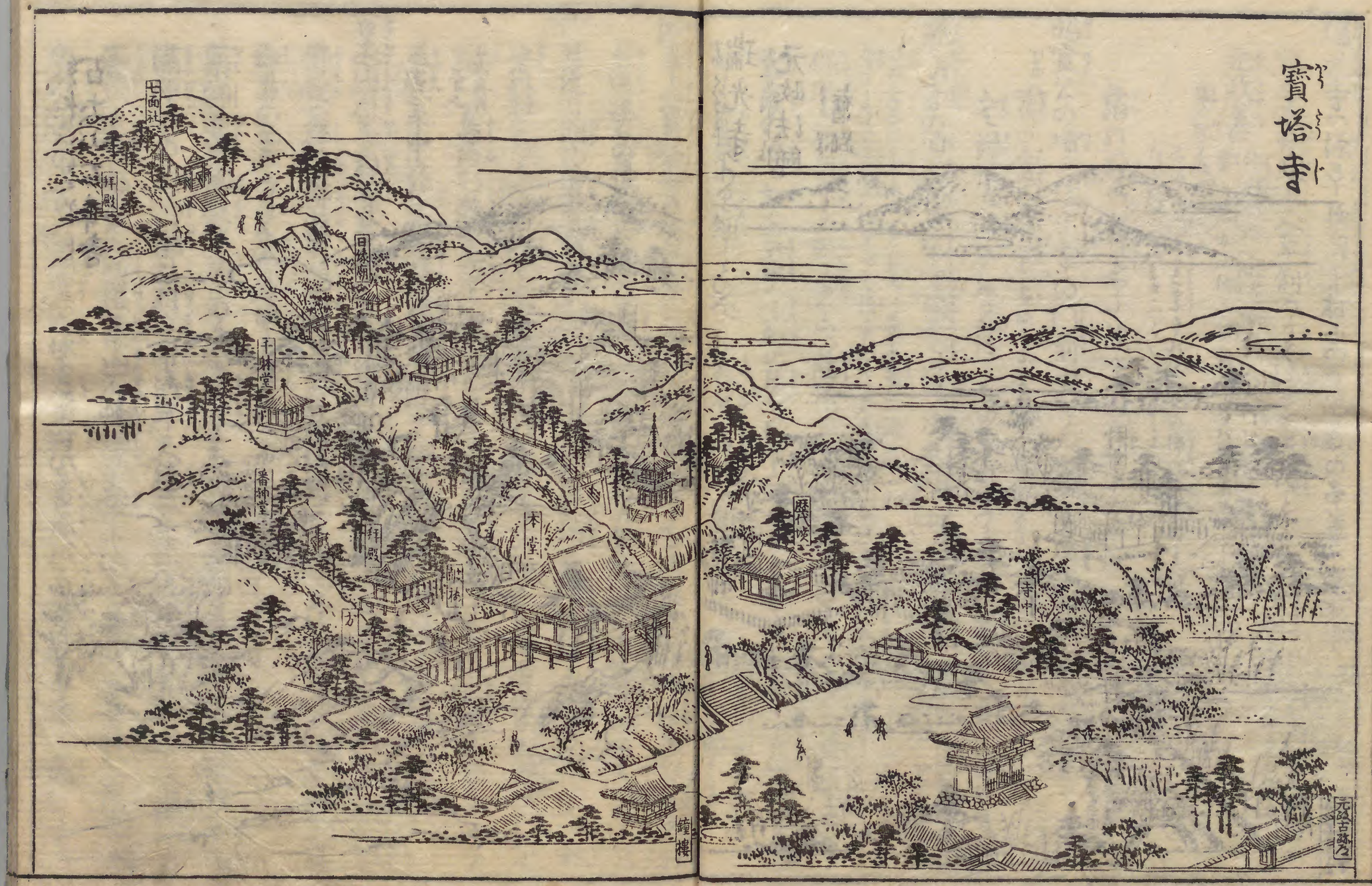
世ふ端午の佳節ふ
武者人形をもてるハ
蒙古退治の吉例
なり

勝れ森の系ハ毎年
五月五日ふして當社の
神蒙古退治ふ為出陣
しなり八日なり神宮なり神前ふ鎧と
宵宮なり神前ふ鎧と
錺て系の日ハ行幸
為の為ふく
走り馬あり

国立公文書館
National Archives of Japan

瑞光寺は草極楽寺村にあり佛殿の本尊は釋迦佛漫公尺脇仏中に明暦
元年に元政上人草創ありて法華道場とせり佛殿の西にあり塚のうへに竹植ゑ常に携ゆ人作の杖なりしかば枝葉茂りしと
元政墓 五輪に腑あり 昔燒肉の墓と茶師堂畑といへ故へ極楽寺の茶師堂の遺蹟なり
道の記に政旧菴にて
この門日蓮宗なれど常の佛はねもねんぶつ
たゞ釈迦のみなれば
落れぬる釋迦ぶつ秋の道 鬼貫
昭宣公の墳は瑞光寺の門前にあり天塚にて巡十間餘上に小社あり 三十番神
堀川の右近大夫昭宣公身はうふの草の山をこめてなるのちかもあり
を埠をつくる石は法くもるくるあり山は烟こたえて 僧都勝延
極楽寺の四方は寶塔寺瑞光寺の打境地なり 大鏡に白川法王堂に行幸ありしの時仲綱堂の琴を
弾じ供奉し爪のうせしを石塔に諸佛に誓しめ果してこれ得めしうて洛次ゆて失しかの昭宣公幼童の時
保胤が極楽寺の賦に東方の勝地象外の境空中の玉宇にして巽山碧嶺山あり
翠浪の湧き如く谷水は玉虹の流をなすと山はあるとしくも其勢千万仞の山の紫
如く飛泉あると細しらんぐも其聳遠境小国なりと云ふ 今は宝塔寺七面山の
参道なり

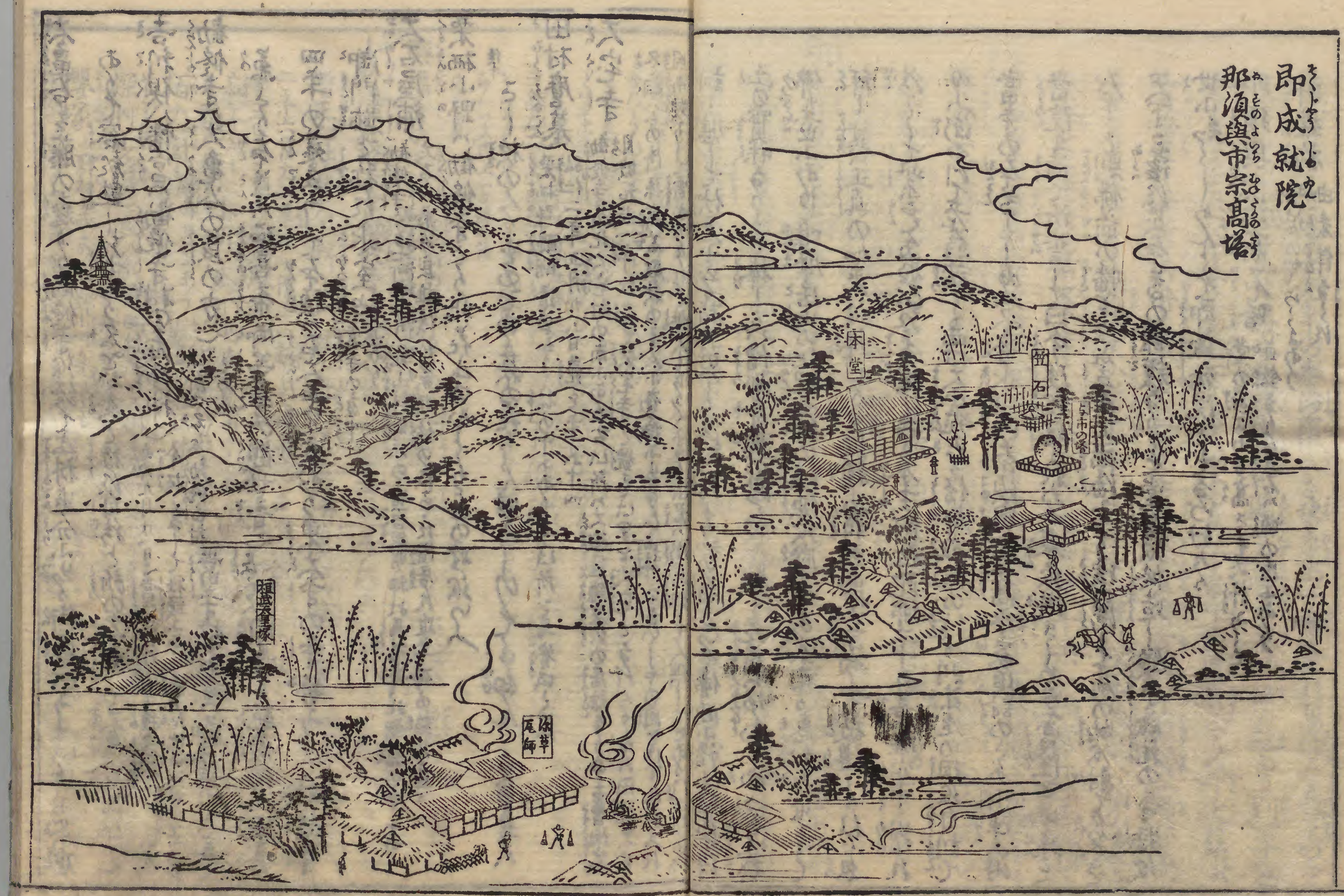
瑞光寺
元政法師
舊跡


寶塔寺
七面社
拜殿
日吉社
十林堂
番神堂
拜殿
本堂
鐘樓
歴代堂
寺中
元弘古蹟之

深草山寶塔寺の瑞光寺の北より法華宗にして本堂に釋迦多宝の二尊高祖
日蓮上人の像を安置し廟塔に日像上人のかけ題目の石塔婆あり又山下に
日蓮日朗の遺骨を収む宝塔と日像の説法石釋迦千躰堂の四ふあり鎮
守は社内に二十番神を祭る七面明神社を本堂の後にあり是経宗擁護社と
十九日に鳥居の額に延政上人の筆と當寺に舊極楽寺にて真言律宗兼ね
延慶年中に住職良桂律師日像上人の教法に従て法華道場と改む

百丈山石峯禅寺宝塔寺の小さ像の開山英碩の三世千呆和尚と
佛殿に釋迦佛額に濟世法王又左右に聯あり共に千呆の筆と表門の額を
即非の筆にして高着眼と書に
薬師堂に佛殿の前にあり此本尊薬師佛長四寸惠心僧都の作にて多田
満仲公の念持佛と村上帝御宇天德二年に攝州多田郷に移り満仲公
伽藍造営ありそれ羅漢山石峯寺と號し本尊弥安元年其後文永
のころ兵火のさわに諸堂回禄に及ぶ然石室に収め中に埋む事より

霜星累りて慶長元年の春沙羅山に夜々光あり郷人怪みて其所を
掘りしに一の石函を得たり蓋に沙羅連山石峰寺某師仏の銘あり則一宇を
営て安置し日々に菴主宗玄と云ふ人の夢中の霊告あり那近の所に
寺を遷し安置せば普く民を化益せんと宣ふ宗玄佛意を仰て自省に負て
小堂を五条に造り因幡堂に暫安奉し祈るに五條の橋東若宮八幡の辺に
堂舎を造りて石峰寺と号し宝永の頃黄檗千呆和尚常に此寺に住
薬師堂に尊信あり日本へ渡り黄檗山の祖席に司獄たる
事偏に霊佛の應現なりと尊く瞻禮恭敬せしかば公命あり
今れ如く百丈山と云ふ山尊像を造り石峰寺と号する
茶碗の釜の湯に潜泉の名を當寺の門前南の方にあり
即成就院と称草庵を造り大亀谷に移る阿弥陀佛の坐像を脇壇に二十
五菩薩を安置し恵心の作と霊像は恵心僧都鹿嶽樵川に移りて説法し給ふ
老人の老翁来りて仏前に拝し南伏見里に住る者と一齊に捧ん事を願ふ恵心其
詞に應じて伏見に赴き指月の下に庵を結び朝夕の翁と仏前に詣し極楽浄
土の寶味を享して捧ぐ僧都奇異の思ひを抱き老翁に問ふ答て我
佛五世に顕はし唯摩居士の化現と師の法徳に感じて来る恵心感涙して
拝し其正真の如来に拝せんと願ふ翁則西に空に向て敬礼し忽
然として紫雲を発して楽と共に本主阿弥陀佛二十五菩薩空中に現れ
給ふ翁は老翁諸々西に飛去る僧都感信の餘り則其迹の相に自刻で
當寺の本尊とし給ふ寿永の頃奈須與一宗高平家追討の為に出陣の時
當院に詣で祈誓して曰今度戦場に於て
ば則佛前の幡を以て笠印と西海に下り壇の浦に扇の的に射て名誉を
天下に顕はす本尊の擁護なりとて堂舎を修造し願を成就の奇特
世に知られんとて即成就院と号づけ
那須與一宗高石塔 堂の西にあり高さ三尺計り
軒端梅 塔婆の傍にあり 由来詳らかに



国立公文書館
National Archives of Japan

大亀谷ハ藤の森より勧修寺坂を経て山科追分に出る街道にいふ 此所に茶店ありて容貌艶しき女あり名をお亀と称す自然と所の名に呼で大亀谷といふとぞ

吉利倶八幡宮ハ勧修寺村の産沙神也 祭ハ九月廿一日也 當社の神木に種字杉といふあり 今ハ枯てなし 又社頭にある梵字ハ阿弥陀の梵字なるの

勧修寺ハ大亀谷の艮の方也 此所の名ハ勧修寺村 当寺ハ宗旨ハ華厳にて真言を兼る 本尊ハ延喜帝御等身の観世音也 長五尺 開基ハ承俊僧正 延喜四年の建立にして本願ハ右大臣定方なり 東大寺の寺務にして勧修寺御門跡と称す

氷室池 当寺の庭中にあり

大石屋舗 勧修寺より七町ばかり乾山科郷西の山岩屋明神の馬場先北側薮の中にあり 大石内蔵助良雄浅野家断絶の後ここに潜居す 近年碑の銘を建る

栗栖小野ハ勧修寺より北花山のふもとの村をいふ

夫木 さし放つくるすの小野の萩の花ちらん時にしりて見よ向ん 大納言[illegible]

田村麿墓 栗栖野醍醐道の西の林の中にあり 今此所を馬脊坂といふ 弘仁二年五月廿三日薨ず 年五十四

大宅寺 勧修寺の北大宅村の南にあり 古此所ハ大織冠鎌足公の居館なり 今ハ曹洞宗 月坡和尚一宇を建て大宅寺と號す 此里を大宅といへるハ閑院大臣冬嗣公の御孫高藤殿秋の末に小鷹狩に出給ひ山科のあたりやの園をはしらせ給ふに 風雨頻りにして雷ありければ供人もちりぢりになり 此君ハ御馬飼ふ人を供して とある門の内に入給ひぬるが 折しも雨風はげしく雷鳴しければ 今宵ハ此屋に宿り 十三四なる女のありしが契りを結び 帰るとき佩給へる太刀一腰を残しおき給ひぬ 其後六年ばかりて思ひ出し此屋をたづね給ひければ 女の子の五ッ六ッばかりなるがいとうつくしきを生て膝に居たり 此児ハ誰ぞと問給へば 一とせ立寄給ひし世の人の形見にて候ふとて 彼太刀を出してみせければ 離れざる身にありて 此家の主ハ此郡の大領宮道弥益といふ者なり 然れば前の世の契ありけると思召し 御所に伴ひて帰り 其母をも共に迎へ給ふ 女子一人男二人誕生あり 高藤卿をやんごとなき人なれば大納言まで登り給ふ 男二人ハ泉の大将 其弟ハ三条右大臣 此姫君ハ宇多天皇位に即給ひしより女御にまゐらせ給ひ 程なく醍醐の帝御門を生み奉り給ひぬ 弥益ハ四位に叙して家を今の勧修寺となし 其のあとハ塔を建て大宅寺と号くとぞ 已上小世継物語の大意

興福寺の旧跡 大宅村の中にあり 旧号ハ山階寺といふ 興福寺橋ハ岩屋の社鳥居の巽にあり

松ヶ崎池 岩屋の社南の薮にあり 又松ヶ崎池といふ

小野随心院ハ勧修寺の東にあり 曼荼羅寺と号す 真言宗にして開基ハ仁海僧正 仁海ハ小野僧正といふ 寛仁僧正之法務ハ小野御門跡と称す 摂家の御連枝住職しあり 二年六月大に旱す 此僧正に勅して神泉苑におゐて請雨経の法を修せしむ 時に大雨降ること三日 其後九度詔ありて皆雨を降らす 世人雨僧正と呼ぶ 永承元年五月十六日寂す 年九十二 已上元亨釈書

小町水 門内南の薮の中にあり 此所ハ出羽郡司小野良真が宅地にして 娘小野小町住れける時 此水を愛して化粧を施ひしとぞ

栢の樹 百夜かよひの数をしるしけるとぞ 厨のおもにあり 源実をかね此地に

深草少将の通ひ路 醍醐往還の西側薮の中にあり 墨染の南欣浄寺の地より小町の宅へ百夜のかよひ路なり 竹林となりても今に竹一株もなせたりといふ

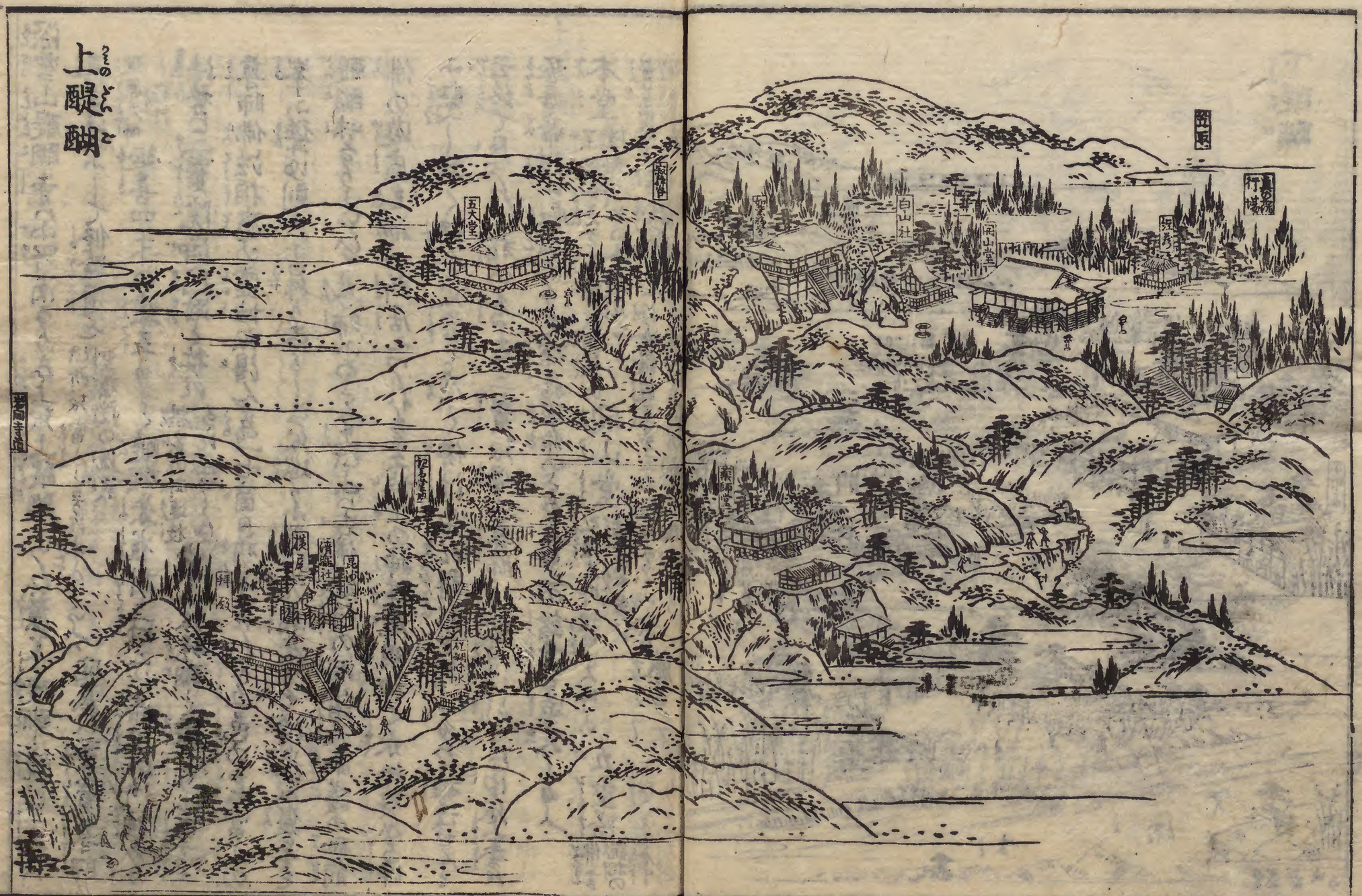
櫻塚 小野村の西にあり 小野小町の文塚とも 一説には後小野宮の墓ともいふ

野色山 道の西にあり小也

負塚 四位少将百夜通ひし折 あまた積し所なり

下醍醐
五重塔
本堂
石戸石
小町の水
八幡
黒保
清滝社
百山

上醍醐



深雪山醍醐寺は小野南ろう山上坂上醍醐と云し蘇と下醍醐と號し下醍醐は
真言宗ふして修驗道と此所坂當山と号し本ゝ〻ゝは岡基は聖寶尊師
理原大師聖護院の流義
延喜四年の建立なり醍醐朱雀村上は代帝王の御願なり
謚に
法勢は三寶院御門跡と称し摂家の御連枝
當山坂碗醐と號なるを聖宝
尊師佛法相應の霊地坂得んが為一七箇日祈念ゝ〻しに五色の雲當山の
峯ふ聳ゆ則山ふ昇りまゝ〻ゝ去坂巡りふ獨の老翁来りて潜泉坂寝星を
醍醐味なるゝいして尊師ふあゝ生ゝ山い古佛練行の洞諸天衛護の砌前
佛の遊處名神の所居ゝつれを星地主の神桜尾明神ゝ永此地坂を師
ふ獻べゝ早く精舍坂営て度く佛法坂弘群類を利しめて擁護せんと
云終て見ゝ又指の為ゝ三寶坂唱ゝ尊師ふ感涙を流し山坂上参た
延喜帝ふ感感ありて除病延命のゝある當山の諸堂を造営しめ
本堂 某師如来を安置し回禄の岡山堂 弘法大師理源大師の五重塔 佛言説相の
優秀吉の所建立なり 像を安置し
曼荼羅を 清滝権現 迦羅龍王弟三の姫坂なる剣祭い
奉尊ゝ
九月九日山門の敵ゝて猿楽あり 藤戸石 三寶院の庭中
藤戸浦ふて佐々木三郎盛綱高名せ清盛の
岩ゝ天正年中聚樂亭より此所ゝ移し
長尾天満宮 本堂の北ゝ九月九日ゝて神輿 花見山 秀吉公花見遊宴
二基あり醍醐郷中の産土神 の地ゝ 天正軍記
上醍醐 麓より山上まで二十七町ゝして一町毎ゝ標石あり石面ゝ梵字坂きざむ 権僧正
清瀧社 龍神 新向石社 醍醐水 閼伽井ゝも 五大堂 不動明王ゝ岡山
成賢の祭ゝ 聖宝の作四尊い
理會僧都の作り延喜帝れ祈願ふ〻く朝敵 如意輪堂 本尊如意輪
平將門降伏の作ゝ本尊ゝ 観世音ゝ安置
聖宝の作り西國巡礼所 薬師堂 本尊薬師佛い恵理僧都の作り堂
ゝて第十一番ゝ 内ふ准胝観音を安置し 弘法大師ふ
後ゝ祖師堂 中央聖宝尊師南い弘法大師ふ 賢僧正ゝ尊
の作ゝ 悪地坂退治ゝ毎年七月ゝ日ゝ日當山の千日
の麓ゝ二ふ〻 寂静谷 祖師堂の北ゝ谷ゝ 詣ゝ〻 縁ゝ山所 ゝ
堂内ふあり 稀

丈當山の松杉翁〻ゝて常ふ白雲横ゝ詣坂封ゝ山坂巍々ゝ
ゝて旭日れ出ゝ本遅ゝ霊泉い混々ゝ玉を注ぐ如く堯の御德
茂ゝ清平ゝれゝ醴泉出夏后の御俊才官ふ立ゝ御ゝ則醴泉涌と
いゝも山醍醐水のゝ〻ゝ

醍醐天皇陵は三寶院の小人家れ東ふあり人皇六十代の帝諱は敦仁宇多帝第一の皇子在位三十三年延長八年九月十一日崩じ給ふ壽筭四十六延喜御門と稱す

朱雀天皇陵は日所陵町ふあり醍醐帝の皇子にして六十一代の主上なり在位十六年天暦六年八月十五日崩ゝ給ふ聖壽三十歲天暦御門と稱す

一言寺は醍醐の南里ふあり眞言宗にして本尊は千手觀音なり醍醐寺ふ屬す

安阿弥の作之内侍堂ふは當寺の本尊阿彌陀如來の像を安置少納言信西の女なり

直谷南禪院は醍醐山の巽ふあり成賢僧正傳道の地なり本尊は阿彌陀佛の坐像にして毒日の作なり側ふ地藏尊を安置

世人田植の比藏し號て笠取山醍醐の南にあり民村多し巽の峠ふ山城近江の國境あり岩間寺は醍醐より三町ばかり東ふあり八幡宮ふ一里あり

一説本尊は行基の作なり

笠取の山なたのみしらんひまなく時雨ふ神をあらしてを我り　顔基

日野の藥師

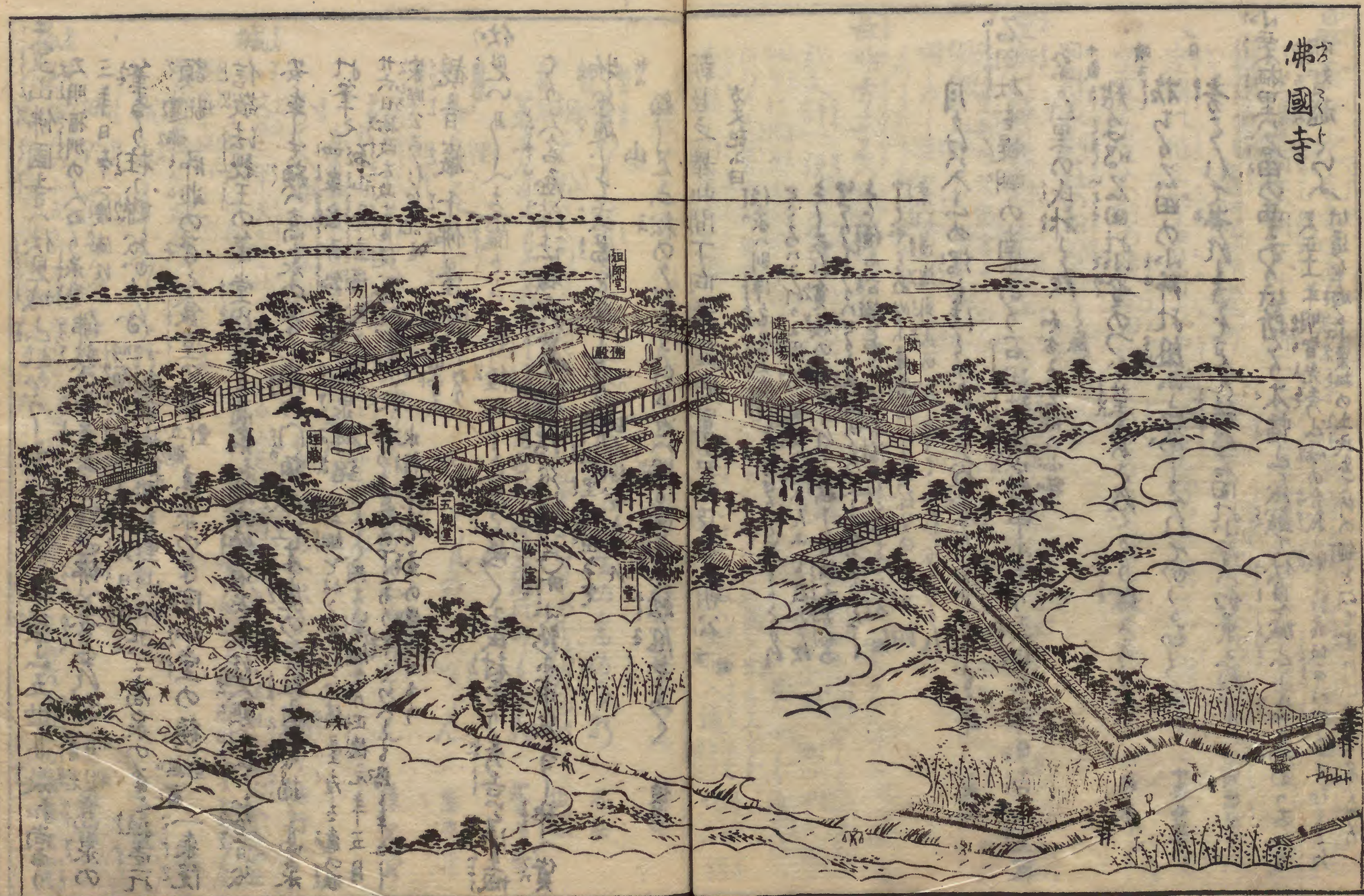
本堂

方丈

国立公文書館
National Archives of Japan

日野薬師を一言寺の南日野村ふあり法界寺と号に本尊薬師如来を金銅
れ坐像と日天月天十二神二王等運慶の作なり左右ふ安置に世人乳出の祈願所
殊に霊験 舊阿弥陀堂あり後壇ふ阿弥陀の像を安置に
いちぢるし
定朝れ作と初を日野左中辨資業卿の本願なり諸堂魏々たり紀伝
堂五大堂大門の蹟今田畑の字となりて當寺ふ人ふあり日野村やを則
日野家別荘の旧址あり 今土人内裡の芝と云
重衡れ塚日野村果園の中ふあり 三位中将重衡卿治承四年南都東大寺攻
の後重衡を後鎌倉より京ふ上り本律師佐局と共ふ日野ふおいて焼失しの大尼眼ゞ平氏滅亡
の後重衡卿れふの方丈納言
畑ゝ ゝ 者後高野へ送り墓所れ聖俊乗坊より中うけそ法界寺ふ葬しめり
くりきい平家物語まあり
長明方丈石ハ日野村のをの〳〵五町計外ふれ山脇ふあり石床三間四面高
武丈計一説ふ名取千人石と云
地勢れ風流方丈記ふくり〳〵をあらん器を峠のあり巌の中ふ穿あり
所あり炎暑の節樵夫の舌取国いとんらく弘法大師れ巌を穿あり
東鑑ふ曰建仁元年十月十三日鴨社人菊太丈長明入道法名蓮胤依雅経
朝臣之舉此間下向奉謁将軍右大臣實朝公云云
方丈記ふ曰
住家ハ則浄名居士の址をけがせりといへども
ところハ狭けれども周梨盤特の行ふだふも及ばじ
もしまた貧縁の報のつたなく悩まんら特又妄執の
いたりてくるハせるる其咎なり
ゝ傷ふ吉根をやゝして不法の念仏あり
汝ふ達磨の二ゝ世ふ生の暁日
栗門蓮胤外山の奥ふ
月うけハ入山の端もはやくかたぶくなり
石田社を醍醐の南ふあり石田社ハ氏家れ中ふあり天照大神日吉ふ玉
長明
みふの山里の氏神なり 和おゝハ石田の小野
千載 雑 なびく石田れ小野のつゝ草 芝 ゝ
続古 枯ちる石田の小野れ風ふ乱 ふ
日 寄 ゝ
小栗栖里ハ石田の西ふあり此所ふ木幡山ふ城ふ出る所あり古城
明智越と云 天正十一年明智光秀山崎の合戦ふ敗ゝ江州坂本れ城ふ
此道ふ越る小栗栖の土民ふて竹の鎧を以て害に此ゆ人ふ
順徳院
中将卿親
飛季

佛國寺



国立公文書館
National Archives of Japan

宝塔山佛國寺は伏見城山の北のふもとにあり開基は黄檗山五世高泉和尚なり
大明福州の人なり承應三年日本へ渡海す 佛殿の本尊は釈迦佛を安置す 額 普光明殿 高泉の
筆なり 柱に聯あり 四面桃花香吐九天日月 千重寶樹擁繞圍萬里山河 共に高泉の筆也 禅堂の
額 選佛場 即非の筆 食堂の額 五観堂 高泉の筆 開山堂の額 無盡燈 一乗院
信敬法親王の筆 堂内に高泉和尚の像を安置す 又大悲閣には観音を
安置して額は高泉の筆也 南の門額 天王山 本庵の筆 柱に聯を掲る 高泉
の筆也 四泉玄奇銘佛國 鈔山玉立蔵天王 高泉碑銘 山にあり 紫銅をもつてこれを鋳る 碑臺座は亀の形にして共に紫銅なり 正徳元年五月
廿六日摂政太政大臣従一位家熈公これが記を 金涌水 右のうち松の下にあり 旱といへども竭る事なし 水軽くして茶の湯に可なり
観音巌 千佛臺 共に當寺の後山にあり

伏見 いにしへは朧々たる野径なりしかど繁栄して民村あり 秀吉公御在城より大名屋舗諸職工人賈人軒端をならべ町小路に市をなす 都へ貨物を通じて交易をなしける

山 野山里澤田をば故人和歌によめり

新古
ふしみ山松のかげより見わたせばあくる田面に秋風ぞふく 俊成

新後拾遺 あはれ
哀ふくる夜の川霧ふしみ山松風さむき秋は寐覚に 慈鎮

里

新古 ゆふ
夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹のふしみの里の雪の下をれ 有家

新勅
朝戸明てふしみの里をながむればあはれにむせぶ宇治の河波 俊成

玉葉 あれ
荒はてぬふしみの里は浅ぢふのむかしを忍ぶ露ぞかゝる袖 式子内親王

野

新後拾遺
女郎花花は下紐うちとけてふしみの野べに人や寐ぬらん 藤原道信

細井

新拾
昔見しふしみの田井はかりねよしや絶えてや寐ぬらん 後京極

玉葉
あはれなりて侍る人の伏見にすみ侍りけるに尋ねて侍りけるに庭の草道も見えぬまでしげりて虫の鳴けるをきゝて
分て入袖に哀をかけよとて露けき庭に虫さへぞ鳴 西行

城山
文禄三年秀吉公伏見城を築き又其後慶長五年石田が逆乱に滅ぶ 今は只丘山にて桃花数十株植て春は夭々たる艶陽の賞をなし遠近こゝに来りて春色に酩酊し桃花のもとに家業を忘る これを伏見の桃見といふ

我宿りふしみの桃の花ざかり 大也

城山やあをゆる火もなく桃の花 幸福

梅渓
城山の北五郎左町の北にあり 此地に梅花多し 早春の花盛には清香を賞す 清凉たる福寿紀行に所あり

本社
春日宮
長谷宮
東照宮
住吉
八幡
竈殿
馬屋
木地堂
九重塔

御香宮

伏見船場

国立公文書館
National Archives of Japan

所香宮を城山の西あり本社は神功皇后なるよし伝へ鎮坐まします年
歴詳ならず文禄年中伏見の城といふ
ふるき神祠なり
九所堂初め九坐の神をまつる
水ふかくして名づく賽石鳥居の間ふかく清人まつり賽銭とる
所多し世人名づく拝殿南の門伏見の城中ふかくし銭あらんかを
赤橋のかゝりは大坂より河流を登る舟着き夜は舟盗のあるゆゑ都ふ
通ふ高瀬舟宇治川をくだる宋舟のごとくおぞりて川辺は家ふ旅宿
をしめ鷺多あり奪取りて饗應ふゝと此所の風儀なり
巨椋は入江ふ豊後橋の南向島より眺めなる水面あり土人小舟の中ふ大和街道
あり五十町は堤あり夏は遠花河背生して炎暑を凉のよすがとす
冬は水涸れ漁猟をうる
巨椋はやゝ沼なる入江の月は沼より光れまして蛍とぶなり　鳥田
入江の南小倉里は赤にあり去日明神とあるは里の氏神なり
九月十日

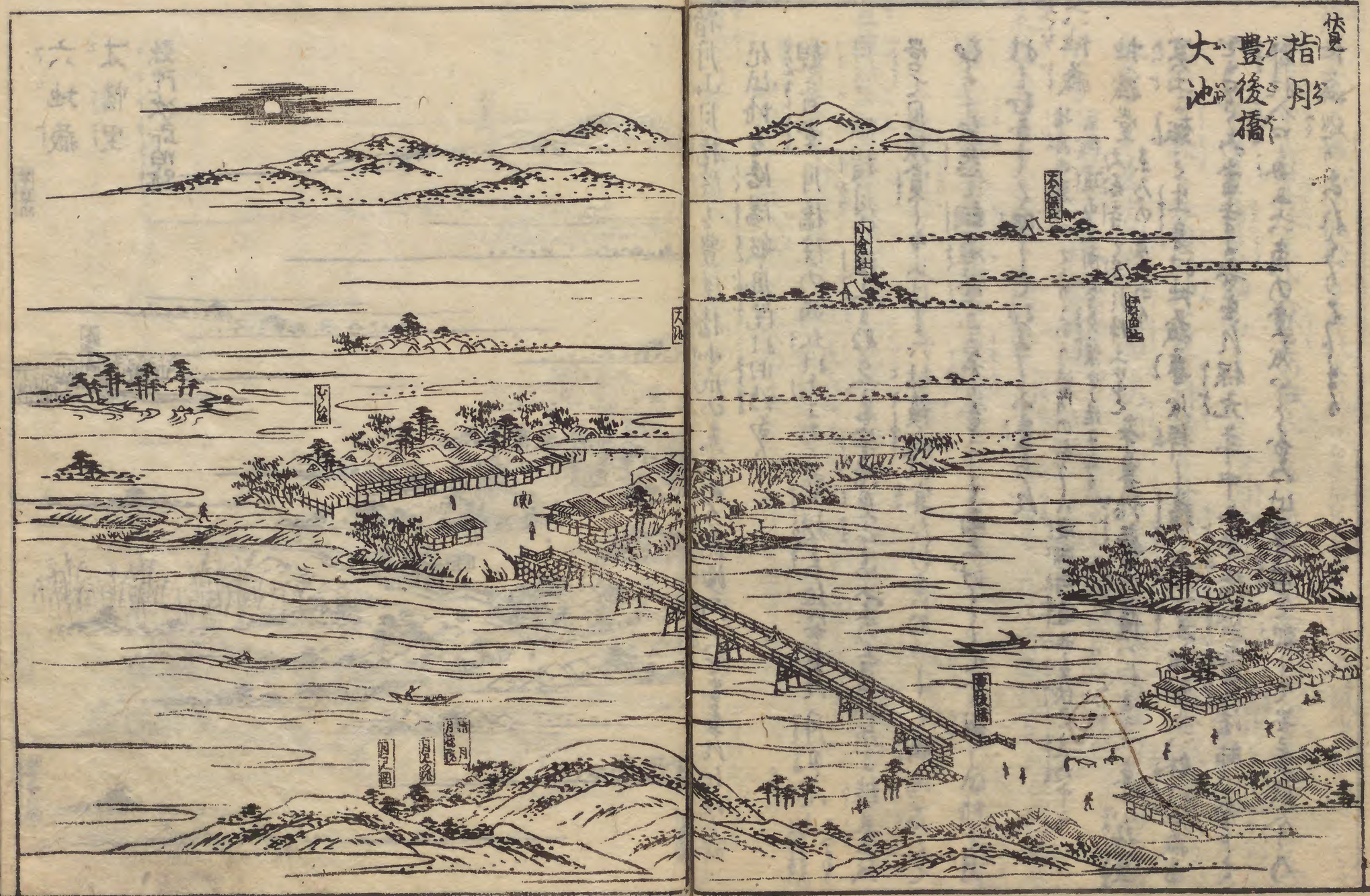
指月山月橋院を豊後橋小爪の東ふあり昆沙門天を安置ふ弘法大師
作此地を洛陽般舟院は旧跡なり
聖観音堂月橋院の西丘は上ふあり聖観音安置
月見岡指月の後ふあり一名宇治見ヶ丘ふ月見沈
営て月銭賞しゆゑ人けもとゝ姑蘇城は寂たけるはかりしも鶴鴨花ん
むかし銭怨ふ銅雀臺ふ葬るゆゑしも西去げくして今林ふ此地を月
はくむかしく照してむかしふ変らず
六地蔵指月の東八町京都道あり南ふ宇治ふ西ふ伏見ふ淀乃中ふ
地蔵堂大岩まし彫ふ作ふ宇治
地蔵堂東乃の角ふあり
宋尊地蔵菩薩は仁壽二年小野皇
冥土ふ銭ふ生身は地蔵尊銭拝し銭て後ふ木銭ふて入躰は地蔵
ときゝゝみ當寺ふ安置ふ保元年中ふ平清盛西光法師ふ命じて
都は入口毎ふ六角の堂銭つくるみ此尊像を配して安置ふ今乃
地蔵巡りまれくりてまる

佐賀

指月

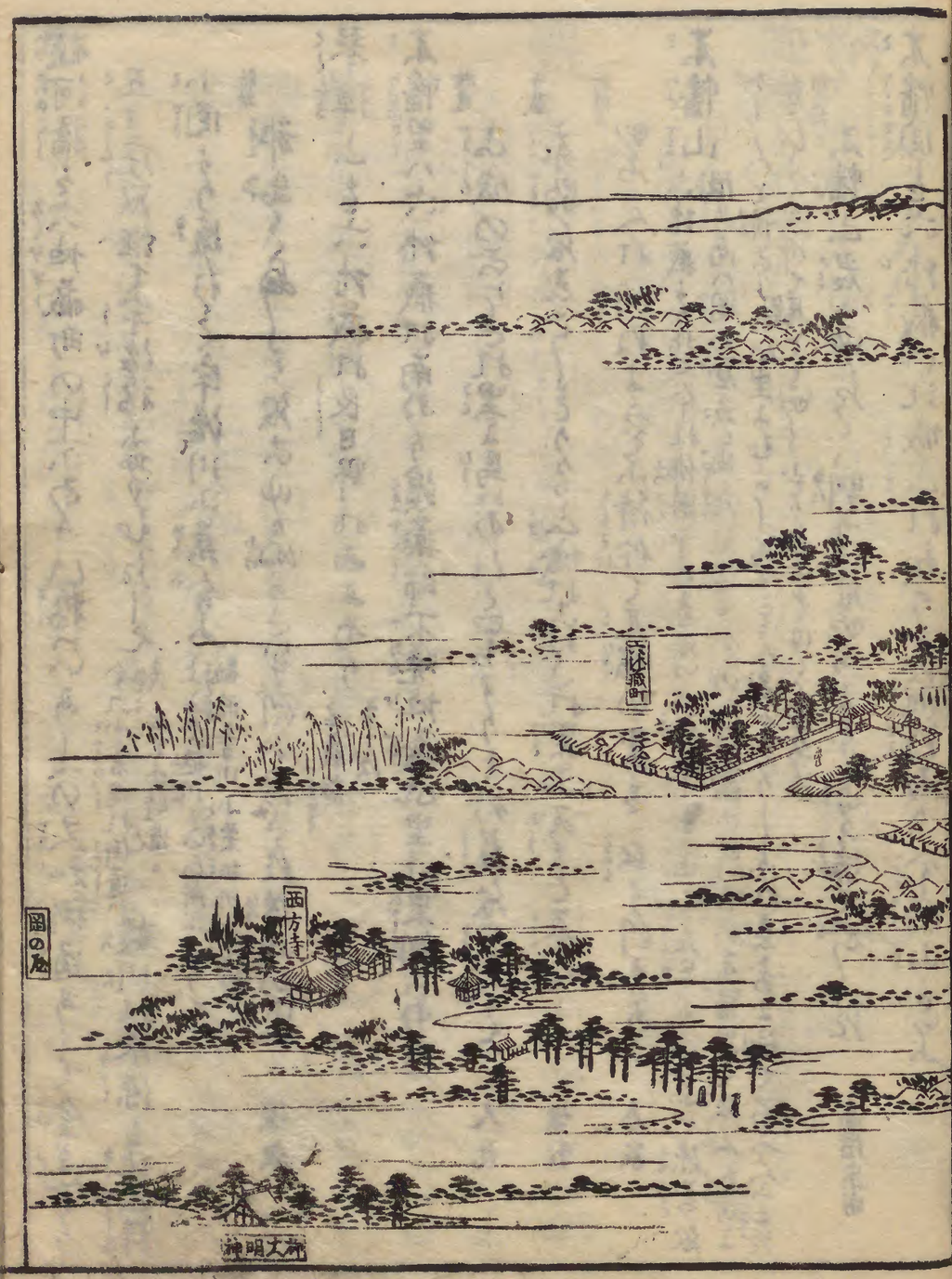
豊後橋

大池



国立公文書館
National Archives of Japan

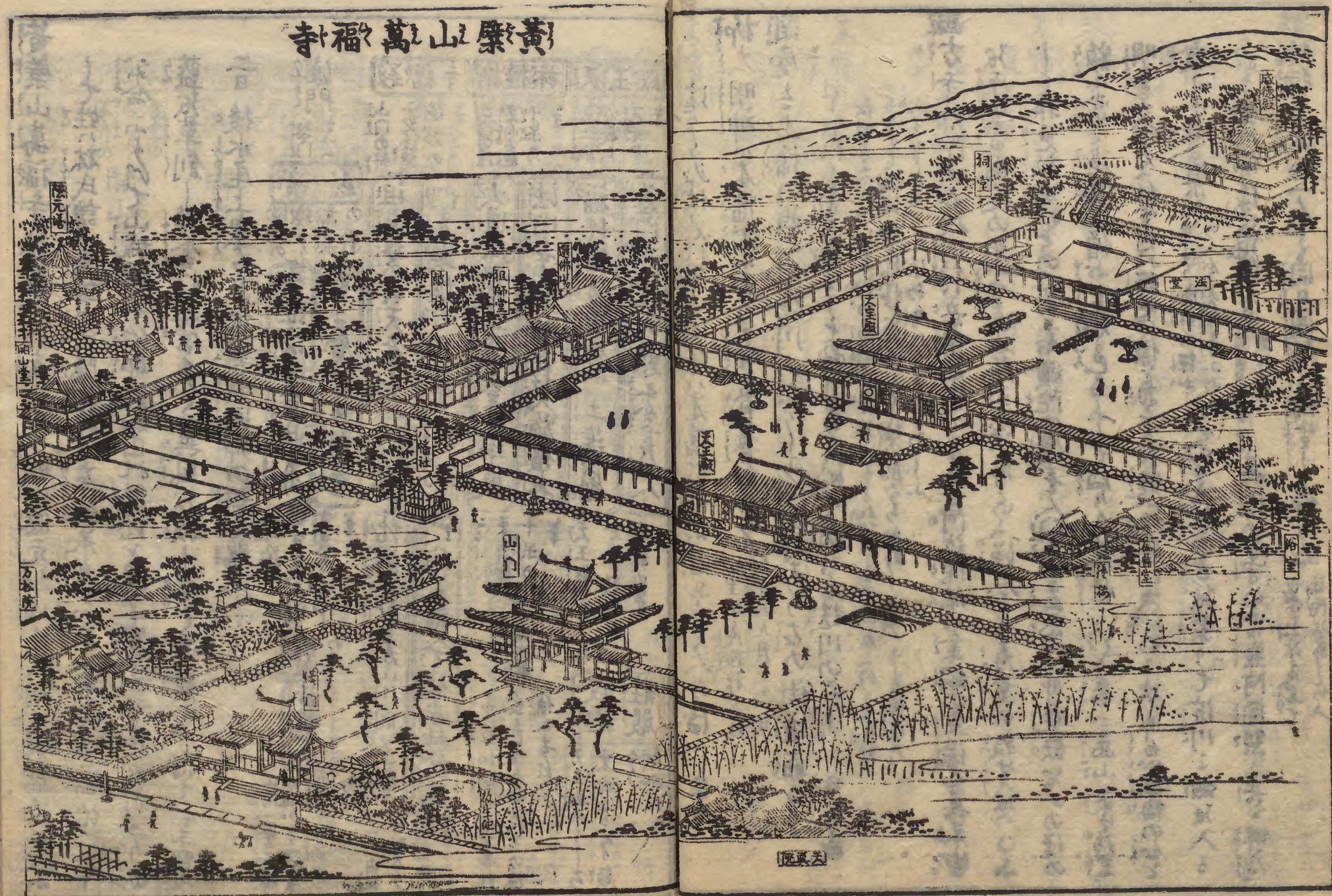
六地藏
太幡里
弥陀次郎旧跡



櫂河橋を六地蔵町の中ふあり此橋いにしへの大和街道なりて金ゲ辻より
五ケ庄坂經て宇治橋ふ抑もむかしこの名れ小倉堤れ街道ハ櫂川れ水源を北山科
小関より流れく宇治川ふ落合ふ上て櫂川と云ふ所ふよりて勧修寺川小栗栖川くもて
新勅 旅出すく姫ゝ坂去ゆる姫のこハまがりつくる櫂川の上 後成
琴弾山を六地蔵れ艮日野れ西ふあり 名義詳
木幡里ハ六地蔵れ南ゆり濱薬師不焼地蔵ハ里れ東側ふあり
拾遺 山城のさらされ里ふ馬ハあれとのちよりを行君坂ゆくへ 人丸
千載 家駒坂去ゆるとうろ山城ハいらこれ里ふみてこ答へよ 後鳥
新後撰 のちの人れ問ぬよりを待佗て木幡の里を去ゆり 右家
木幡山六地蔵より北之今れ佛國寺の西坂ハ小ハ源茅坂
限り南ハ岡の屋五箇所坂限る今の六地蔵の町古の木幡里之故人和歌ふ
かちの人と詠ゆ小里ふむ馬と人多くあり馬を乞ゆ
新後拾 木幡山君ゆ行くい馬う坂のちうり多る旅を思ひ 高階宗成
木幡岡を六地蔵の北城山れ西ふあり今岡山と云

遠くゝぬ伏見れ里の関守ハ木幡れ岑ふ君坂ゆ人ゆ 家隆
柳大明神ハ木幡里ふあり天忍骨尊坂ゆる 里の産土神ゝ
例祭ハ九月十六日
閻屋を木幡の西之宇治川の西之ゝふて民村あり古の街道筋なり
日ゝれ岡の屋ゝ姫ゝ坂ゆ櫂川のゝ 後拾遺
長明方丈記ふ曰若干の白波ふ身をよせ
沙を折し屋ゝ流れ坂ゆ
西方寺弥陀次帝れ四仏ハ五箇所ふあり本尊阿弥陀佛ハ金銅の立像之真来也
坂原ふ當國淀の東一口ゝ所ふ五次帝と云ふ所ふ五次帝と云ふ人あり寿葉の教ゆ坂つゝふ
して邪見放逸れとのくあり姫頭陀の僧寺ハ門戸ふ立悪次帝焼鉄坂ゆの僧の
額ふ當て追放ゆ僧ゆも怒色るゝして姫ゝ西山栗ゆ浄光
明寺ふ入て月ゝ堂内れ釋迦の像を拭ゆ次帝ゆ額ふ焼鉄ゆ押ゆ次帝ゆ心懺悔の心と
發して佛道ふ入ゆ是ゝ御鉢の釋迦ゆ今光明寺ふあり
ふ紫金れ佛像坂湯ゝ當寺の本尊ゝ真後當寺の常照阿闍梨ゝ共ゝ佛像
修行ゝ遂ふ二人ゝ同日同所ふ往生ゝ侍りぬ 紫金坂名ゝ
弥陀次帝ゝ

黄檗山萬福寺



黄檗山萬福寺は五箇庄村南にあり開山隱元和尚を大明福州福清の人にして姓は林氏諱は隆琦字は隱元なり本朝承應三年に東渡し萬治二年公命ありて山城國宇治郡大和田村勝地を賜て寛文元年九月より伽藍坂草創し精舍を經營多くは異風を摸し名を黄檗と号す百十三年四月二日後水尾上皇より大光普照國師の號を賜へり

後水尾上皇より大光普照國師の號を賜へり

漢門 懸門 額 一義 高泉の筆

宗經海道重地 漢門の額 聯 高泉の山門 聖主賢臣忠仰ぎ 聯 高泉の山門 黄檗山

祖席繁興天慶大 山門の軒 聯 本菴の筆

福 山門の法 額 隱元の筆

門庭顯揚日精華 聯 本菴の筆

檀林 東向の額 千呆の筆

大道没處横進步直登兜率殿 東向れ聯 千呆の筆

法門無内外獨身投入旃檀林 聯 天王殿のうしろ 額 東向 即非の筆

天王殿 三天王殿の額 本菴の筆

福地鍾靈特感四王護國 聯 天王殿のうしろ 額 即非の筆

慈門現瑞大悲之會度人 聯 本菴の筆

北望秋日月山川同芝聲 聯 即非の筆

門風弘福人天龍象任登臨 聯 即非の筆

首冠兜率感應三洲功德 聯 東向 即非の筆

賀樓寶拝護持正法德維磨 聯 千呆の筆

大雄寶殿 釋迦佛の坐像を安置

大雄寶殿 釋迦堂の二重屋根 聯 本菴の筆

寶殿 聯 本菴の筆

天王殿 布袋和尚の像を安置 金色の四天王の像を備ふ 聯 千呆の筆

威德殿 天王殿のうしろ 聯 即非の筆

莊嚴 即非の筆

彩德尊 堂の額 本菴の筆

仏殿 堂の額 聯 即非の筆

法堂 堂内の額 本菴の筆

獅子 法堂の額 聯 費隱の筆

法堂 堂内の右 本菴の筆

棒喝交馳國師千古猶生 聯 帝王 即非

威德殿 即非

威德殿

仁明昭日月 聯 即非

威德殿四河 聯 即非

山河 威德殿の所 聯 千呆の筆

正氣 聯 即非

祖師堂 建堂人師 金毛の像を安置

象龍圍繞靈山一會儼然 聯 千呆の筆

祖師堂 堂内の本尊の選佛場 即非の筆

選佛場 即非

禪悅堂 食堂の額 聯 本菴の筆

開山堂 書院の額 聯 即非

食堂 聯 即非

食堂 金毛の像 即非

伽藍堂 伽藍神の像を安置

伽藍堂 聯 即非

大顧堂 大願の

伽藍堂 堂内の左 聯 即非

開山堂 開山堂の内の額 聯 即非

開山堂 同堂の額 聯 即非

玄通 開山堂の内の額 聯 即非

玄通 即非

壽藏 即非

天開壽藏長生日 聯 即非

北望松岡不老春 聯 即非

隱元碑銘 開山堂の後の左 後水尾院より賜ふ 即非

舍利殿 開山堂の後の左 後水尾院より賜ふ 即非

華嚴室（釋迦佛）節竿旗（大雄寶殿）の松岡（當山の茶毘所）妙高峰（天壁山の嶺）

五雲峰（妙高峰の南）

明星山二室戸寺と芙蓉の南大鳳寺のむかひあり本尊千手観音八圓海

檀金の立像あり長八寸弐分宇治山の東岩瀬の庵より出現（西国十番のれ所）

光仁天皇の御本願あり天智天皇の御墓の中興隆明法師

宇治山を二室戸山の南と喜撰法師山所を住のひじりとうん

続拾遺

うちつけのむかしの名をとりふるる　法眼素融

女　ちゝねら

後撰

宇治山の紅葉をゝとゝけ長月の雨をまつ人をあはせ

喜撰嶽を二室戸より一里ばかり巽にあり横川村のうしろにあり岩崛

ありてさわ谷喜撰洞といふ山絶頂にあり喜撰法師をふかくこもりし

しゆくを阿ら井姓ゆゑ喜撰ら住家を二室のおくにありといふ長明ら名ゆゑ八

家はるゝれと堂の礎ばかりとゝ二室のおくに町でうり山中へ入て宇治山のこれ撰ら住るゆゑ

の庵ゝ宇治山の住きせんいちゝ無ゆゑ人ゝ古今

秋の月ゆゑあるゝ

三室戸寺

都の巽宇治は里へ
茶は名産うしく
高貴は調進来る
の例あり製法化
境ふ〜〜びゝ〜
らゝ夜ちり卯の花
咲そむる茶摘
そゝ山里の春
の女白れ手織を
いくぐを赤を前
ぐれを腰ふ羅
して茶園ふ入り
牽おろしく云る
びくゝ春風ひて
無ゞるあり
陸羽の茶經五
書遺し伝る

宇治里 あづまの道 都より約程四里ばかりて宇治橋の東を宇治郡西を久世
郡くむとう應神天皇第五の親王菟道稚郎子ふ帝位をゆづりまつりたまふ
辭しまつりて因居しまつる宇治宮と号し兄大鷦鷯皇子小濤の御ゆゑを以
父帝の勅をもて仮ふ郎へたまふ辭しまつる事三度に
終り遂ふ宇治宮にかくれ薨じ給ふ兄の親子即位しまつれ仁德
天皇とやそなり又皇極天皇に大和國飛鳥宮より近江の比良宮へ幸
なりて宇治里ふ一夜泊りたまふ尾花咲りて菴咲たる也行宮とおさ
しまつる宇治都とつゝ傳る

新勅撰集 秋ふかみ尾花のうへの白露ふ月のかゝれる玉かとぞみる 藤田主

後千 おもかげの尾花のうへの白露ふ月のかゝれる秋の夜の月 左衛

新後拾 さゝ波ふ霜ふ枯のこゝろかなりや夜ふけらんられ里人 雅成

抑宇治の名產ふ氷魚鱸鱧 一名宇治丸 圓排 素磨 風炉 炭等なり
素ふ本朝の極品ふして天下ふ名高く餘滝山の甘露ふも風風と

の龍焙ふと劣らぬ名產なり梅尾の明恵上人種茶異國より
得給ふ脊振ふ栽置てまれと出石上素ふ名ぶけるまより宇治の
風土素園ふ可なりとて裁初しなり
婚姻石ハ三室戸より宇治橋ふ至る乃ふあり 石面三方ふ彫る 推ゞ本社ハ彼方の像を彫
の町ふ鎮坐し四面座の觀音ハ七尺ふあり浮舟宮ふ宇治の小彼戸と云
所ふあり橋姫姫のうたとしハ川の西ふまれハ源氏宇治十帖ふちなみて
いふ〳〵より名度くちまいのあるに浮舟の君木玉ふとられくふ浮れ
うしろの木の下ふ捨られあるいうんそくふ也ふして薫大將推ゞ本社空
しき庭ふ立ふ中の君ハいとび祇打てふのあうみまつりたるとやる
も皆ふかりられ名蹟ふ物換り星うつりてむかしを慕られ侍
宇治川水源ハ琵琶湖ふして流々とながれ石山瀬ふ經て山ふ
めぐり巖ふ觸れて宇治ふ居淀川ふ入 此間ふ鹿飛瀑ふ
をのゝ海のやそうち海のわろ木ふいとうふ彼れの素ふ成も 人丸

千載 朝朗宇治の川霧絶々にあらはれわたるせゞのあじろ木　定頼

新古 暮て行春の湊はしらねとも霞におつる宇治の柴舟　寂蓮

山吹瀬は融大臣此地に別荘ありし時川岸に款冬を多く栽ゆへにしか名付しとぞ

続古 花の色の折られぬ水にさす棹の雫も匂ふ宇治の河長　定家

新拾 ちりかゝる款冬の瀬の白浪に花さなからにちれ河長　西園寺相国

橘小嶋崎は宇治橋の川下弐町ばかりにあり 平家物語に曰 平等院の丑寅橘の小嶋が崎より武者二騎ひつかけひつかけ出来り 一騎は梶原源太景季 一騎は佐々木四郎高綱なり 人目には何とも見えざりけれども内々先に心をかけたりければ 梶原は佐々木に一段ばかりぞ進んだる 佐々木如何に梶原此河は西国一の大河ぞや腹帯延て見えさうぞ 締給へといはれて梶原さもあるらんとや思ひけん 手綱を馬のゆがみに捨左右の鐙を踏透し腹帯を解てぞ締たりける

続古 咲匂ふ小嶋か崎の山吹や八十うち人のかざしなるらん　光俊

同 袖の香や花とあるらん橘の小嶋か崎によせし夜半のうき舟　太上天皇

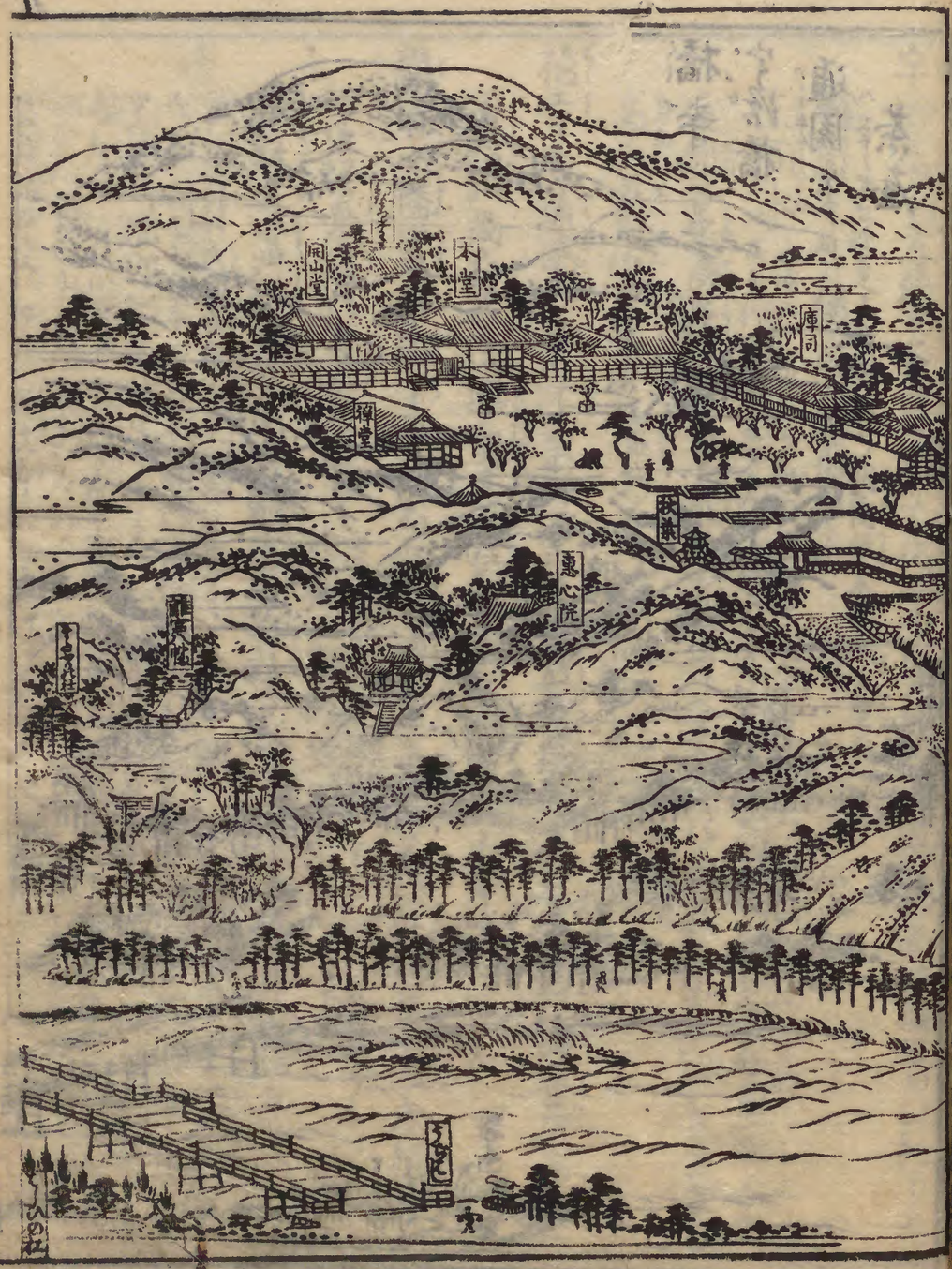
源氏物語 兵部卿の宮宇治にかよひて浮舟の君を西阿屋の宮にいそぎて行て ひいて浮舟にのりの侍従の人をよれてる橘の小嶋しやて侍ふとまうしければ かれうんかんの人や手をせさせ見給ふ兵部卿

年ふとも忘れん物か橘の小嶋か崎にちぎる心は

女も見つゝしたのゆかしさにて あはれまのまゝ

橘の小嶋の色はかはらしを此うき舟そゆくへしられぬ

宇治
興聖寺
惠心院
離宮
八幡



宇治橋を孝徳天皇の御宇大化二年に元興寺の道昭和尚が橋架かけ初めしと
橋小島清西より顧バ宇治の長橋えを望ハ
三間水と城の石水うり頻田の橋下龍宮より流出る水此所へ流来る所と又一説
みを作り橋を流れ天の社邊の下より流出て秀吉侯の帰城の時あり
通圓が茶屋橋の西の方に八つの人は茶屋調て茶を
商ひ茶店ハ通参ら係あり むかしより宇治橋掛替のしるい
橋寺を通参ら云ひ伝ふあり常光寺放生院と号ハ沙汰しなり遊りあるし
道昭和尚と其後興聖菩薩ちなみて橋供養しの人
離宮八幡宮を橋寺の南にあるある神を坐して上の社ハ應神天皇仁德天皇
下の社ハ兎道の尊を祭る 足平等院の結守ハ宇治郷の産土神なり
祇園の基例祭ハ五月八日
叔社を當社のかよあり離宮と橋社ハ
當社の神ハ氏郷平忠文の霊なり 則此地忠文の別社なり朱雀院れ
仲平天慶二年三月平將門征伐れ秀郷貞盛忠文等將軍なりて
ゆへ将門敗逃ゆ勅賞のことあり
ちなみ忠文ハ九條右大臣寛頼公寛人中ハ刑のことあり
りて賞のうさかハしきとバ
其ハ治ちり多り 忠文ハ云ちるとるとハ八つの八ちの乃

野まで遁りて血を灑ぎ給ふ断食して死たり甚しき悪霊となりさまざまに祟を
なしけれバ小野の家を絶たりとて此霊を宥んとて神にいはひて宇治に
離宮明神と崇め後金泉院の所宇
治暦二年十月七日正一位をさづけらる

朝日山

朝日山ハ離宮の後の山なり又菟道尊陵 朝日観音 此山腰にあり

風 朝日山ふもとをかけてゆふだすき八十うぢ人もつかふ摘し　顕家

日 あさ日山まつかけ深く晴るゝ日は晴ひかりもうれしき山の本かな　資明

朝日山恵心院ハ離宮の南にあり真言宗にして開基ハ恵心僧都本尊ハ大日如来ハ
弘法大師の作薬師堂に其像も同作又恵心僧都七十六歳の像堂内に安置す
本堂の額 恵心院 持明院基時卿の筆開基源信僧都ハ和州葛木郡の人にし
て姓ハ清原氏叡山慈恵法師に随ひ顕密の教をよくきはむ一乗要
訣。往生要集。阿弥陀経疏。大乗対倶舎抄。因明相違断纂を著し恵心院の
僧都と称す大唐南湖知礼法師に問書を送りしかバ大に感歎し答
釈を送りて返し給ふ寛仁元年六月十日徒弟をあつめてたゞちに往生の
旨をのべて教義の疑しきを問ひて其かるべきを定めさしむ其後遺言を
さしげ上足慶祐法師を召して其はしに終をとげ給ふ歳七十六なり
時に天楽空に聞えて奇香山中に満ちむらさきの雲西にたなびきしとなり
趙宋皇帝僧都の道誉をきゝて塔廟を建て像を画してうやまひしとなり

新古 我だにもかくれん極楽にむかはん心こそ皆むくいなれ　僧都源信

佛徳山興聖禅寺ハ恵心院の南に隣る曹洞宗にして開基ハ道元和尚之仏殿
にハ釈迦仏を安置す額 興聖宝林禅寺 普蓮院尊純法親王の筆当寺ハもと淀
深州里にあり 今の東福寺の南欣浄寺の境内也其の旧地也 正保年中万安和尚中興して諸堂ことごとく
城主永井直政の建立なり門前ハ門おすそて琴坂といひて左右に桜紅葉を植
山腹を透通くして朝日山の庭中にあり白槇を植ては虎と見立蜘蛛踊吠
見られては宇治の川瀬の簫の声に似り法を聴て龍の室に入床を敲て
虎の堂まかりしを此禅刹のたゞしきなるべし

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　ばせを

観流亭 岸の上ハ禅院の中にあり 亀石 観流亭の下にあり形亀に似たり 中宿芝 恵心院下岸のかたはらにあり

家集

鳥羽院の
小面命ふ
江上蛍火
とゝまる歌
よみ人

いさゝゐ
れ
螢の
ねゝ
ち
ゝ
孫
ゝ
も
江の
芦
れ
みゝ
葉
て
ゝ
さ

源三位頼政

国立公文書館
National Archives of Japan

槙嶋を宇治橋より乾八町ばかりふかし　宇治橋より豊後橋まで凡五十町の堤なり名称槙堤と云ふ槙嶋目印上流下流

筆の民村より上流より英雄の舟つゝあるこれを流れ来るなり

金葉　宇治川の川水もうこぬ久方ふかし橋の柱人舟よこぎ人ちかう　基光

拾遺　河風れ夜毎の月のあらん橋乃柱人　為道

橋姫社　一説に宇治橋の西に先あり　今礎存せり

古今　さむしろ衣かたしきひとりかもねん　橋姫　後撰　宇治の橋姫

此所の評説をとりて所の神をまつる神社橋姫の社ふかし

袖中抄　住吉大明神橋姫の社ふかし

泳の人の手をとりて所の神を清捕れ説ふかし　佐保姫　龍田姫

田姫　龍田姫　旧妻　橋姫　ふるさとの人　糸弾国の作説ふかし　離宮の神夜毎ふかし通ひ

嵯峨天皇の御宮ふかし　暁毎ふかし　玄恵法師の日むかしの御歌を云ふ　鬼と化をとれを橋姫ふかし　宗祇の説ふかし

妻を立て　妻立て　我ぞ人妻

よりてこちらの儀を不審ふかし　源氏物語に橋姫はあるなり

物語ふかし　遍院殿の御説も清捕宗祇のふかし　所詮　佐保姫　龍田姫　橋姫　宇治の姫

とりて源氏口授のあるなり　所詮　道の師ふかしそ

新古　あしの本ふかし　浪のまくらに　橋姫　悪圓

摂　橋姫　紅葉　綿　後宇多院

浮舟　橋　宇治　弘安九年　興聖菩薩橋供養の記に高三五丈十二重

新拾　宇治の橋　石塔婆を造る　近年　水の源流に　鵜飼瀬　浮舟　宇治　南　頼康

うつし舟　武士の　宇治の　夕やみ　乃元　表圓

槙尾山　橋より南　北向　土人九山

新後撰　まきもたれ　槙の　朋乃　雅経

玉葉　あしぐるま　槙　宇治の川　土御門内大臣

平等院
新後撰
河風ふ
月の
八十うち
定家
西勝院
方丈
大門

本堂
法華堂
鳳凰堂

平等院を宇治殿の南にあり初は河原左大臣融公の別荘なりしを其後陽成院此地に行宮なれば建られし宇治院と号し又承平御門も崔院に所々遊猟し給ふ

季部王記に云ふ人々をして六條左大臣雅信卿の所領となりしが長徳四年十月御堂関白山院を淳和院と莊厳し遊覧の地とせり其後子息宇治関白頼通公永承七年に寺に改めて平等院と号し法華三昧を修せしむ 河海抄の大意

佛殿は鳳凰の象り左右の高楼回廊と両翼に後背の廊尾に棟の上に雌雄の鳳凰あり金銅にて造る 故に鳳凰堂と云ふ

本尊阿弥陀佛は長六丈の坐像にして定朝の作なり堂内の壁押み廿五菩薩乃像あり四壁及三方の唐戸は淳和九品の相を画繪師の長者為成の筆上に紙形あり観経の文を書き中納言俊房卿の天蓋瓔珞等を七宝を鏤古代の作なり美麗荘厳なり

鳳凰堂は永承年中頼通公建立なり 昔て回禄の災に鉤殿観音堂を最勝院と号し本尊十一面観音を立南方の奇観なり

像あり左右に地蔵尊不動明王を左右にして脇塩を安置し所宇治院の鎮護と定めり

扇を源三位頼政治承四年五月廿六日に所々に令旨を下し

頼政卿の令旨

頼政卿は平家を滅ぼすと

駒磨松 頼政馬をつなぎ給ふ所

鎧懸松 頼政鎧をかけ給ふ所

阿字池

鳳凰堂のあづまにあり

鐘楼 龍宮城の鐘の真一

阿弥陀水

表参道の作り

橋の下に作り

法華水 淳和家方丈の名

楼門の内

六字の名号の石塔を建る

所林の内にあり

焼失の後此を遺る

抑当院を大台淳土の二流あり台家は二井寺を屬し寺勢を圓満院御門と云ふ淳家は宇治関白の菩提所にて心誉上人を世く淳土宗なれば当院を守る 方丈は頼政の鎧兜及び畫像あり

金葉 うちは平ホ院のまきたりてよみ給ふ

宇治川の座のとりかはりてよみ給ふ

宇治別業 宇治関白頼通公の寄宅を平等院のうしろ西の方方四町なりしが今所の字しるしなりて池殿 岩橋 御園 所舎町 公文所等の名

続後撰 宇治に住侍りける頃

人のもとへまかりける

里なれぬ山かつきたる宮古の人まちかねてもとるなりけり

宇治前関白太政大臣

忠快法師

侍中群要ふ云城國
宇治の御網代より
日毎ふ鮎魚を進る
とゝ云へども今は
武州ゆくて所せの
ひへ結汲こそ平等
院より十町ところ
川上樓門のもとの
やくりうて人ゝ巖
の扇ゝゆゝ居く
早瀬をせゝろ結を
汲上ゆく興こそ
しを李白の詩ふ
茅戸候と慕も
しる武くのこゝ
換ゝをとゝ

又氷魚をとゝて
毎年九月より
十二月まゝまゝを
貢よゝ花鳥餘
情ふゝとゝり

拾遺
物ゝゝぬ
為成
うちゝの
網代木
ゝ
あほくの
ひとも
るゝ
つゝ

侍人考ゝ

宇治田原名村

煮栗焼栗林

縣の社を平等院の後西門れいの傍ふあり 案ずるに所は元前道鏡の墨ゑりしを一説には
宇治は悪左府をふせぐ人 保元物語小白宇治左大臣頼長卿は知足院殿下の三男なり 信西を師として常に学窓にあり仁義礼智信を正くし賞罰
勲功を捌政勢ならびなきりしを七上下の例条を五月五日夜祈禱一基あり
義憤ふかくこれ時の人悪左府とぞ
金色院白山権現を白川村ふあり 平等院より十八町 南うり 開基を昭澄上人 武里に奉祀祈
くんぬを九月十八日之
宇治田原は平等院より凡五十町南にして左宇治川右を山嶽巒をうり峨峨
嶮しくさかしく栗子山越という人 近年頃をうつる岸ふるつる稜て道狭く
まれに舟やうりて薪を運送る是より田原郷まで四面みな山にして中に数村あり
南を牛馬の付来自中うり
郷口という人を小の方郷中の入口うり
大宮明神を郷口の長ふあり 案ずるに山郷内に奉祀祈 案ずるに九月九日祈禱一基あり 所未詳ふ
田原親王社 所廟は大宮社南ふあり 光仁帝の御父にして施基皇子と号し
猿丸太夫の田ふを田原郷御定まれ村のをり奥山田ふあり 此地山間屈曲して比類なし
近ふの國境ありて山城州戸塚村ふ出 此樵ふり山城
惣九谷ふ分をうつる田上川をうつる猿丸太夫墓ふ是ぬをかをうつる山城
煎栗焼栗林は田原郷内名村ふあり ひとり浄見原天皇八世孫ふ避て吉野ふ隠
居しかの人は大友皇子ふ紀ふ猿丸ふ猿丸ふ 天皇すてりしこと
里人怪みうたがひけるに見ぬ人ふ
ちかふ人のいて我ふ
不思義ふとしふ作ふ立をく逐ふ大友王子を宮ふ
ありて吉野王子位ふ即あれふ天武天皇と称ふ栗樹次第ふ繁茂し凡方四町の栗林
とうるまんを祈栗樹ふ焼くるが如く煎ふる如くれ栗今ふ生して当ふ七不思議の其一ふ
天皇寶祚を継ぎ全瑞ふうて今毎年 調進の時節ハ公家より官人来て守護 禁裏ふ貢上りて
八幡宮を栗林の東ふあり 田原郷中の宮ふ武天皇上八幡宮の
信西塚 大道寺村道の傍ふあり 此所より就る峯山ふ至るうり お納言信西ハ道を左傷ハ智信
頼ふ為ふ敗ふ一首を斬 抜 此山里ふ来て土中ふ穿ち自埋りて
すの酢 鮒の人 行合ふ信西ふ見て 相ふ
所前ふて相人ふ行合ふ信西ふ見て 相ふ
大道寺田ふを大道寺村まあり 今草堂 紀安ふ
此所 峯山の藁うり

鷲峯山金胎寺

行者堂
千手院
五重塔
大師御行場
陰陽の滝
鷲峯の滝
大宮
原山村

空海聖人
御生誕の
拝所
金剛童子
本堂
多宝塔
鷲住石
西の坊
大師堂
信貴大仏像

就鳥峯山金胎寺を和束郷内系山村の巓ふわり宇治田原郷口より一里半天道寺村
北六町より一町毎に標石あり 天武
天皇の御宇白鳳四年九月中役優婆塞ゝ山を開き天皇の霊祈願ゝ山ゝ
八つの嶺八葉の蓮華の如し釋迦嶽阿弥陀嶽弥勒嶽寶生嶽阿閦嶽
虚空藏嶽不空嶽妓楽嶽と號し巖頭に坐して修法ありて五七日終り
是當山の開基なり其後元正帝の御宇養老六年に越の白山の行者泰澄法師
役芳沢に暴ふて登山し七堂伽藍を造営し法世に及んで繁盛し今
堂塔を存せり
宗旨は真言にして本堂には弥勒佛を尊ぶ 行基の多寶塔は愛染明王を安
置ス 伏見院の御建立にして行幸の時行宮の旧沢虚空藏嶽にあり 開山堂は役行者像を安置ス 後鬼あり 金剛童子
社 當山の鎮守 鎮守は八日本金柱福満権現 八幡宮 金剛童子を勧請ス 空鉢峯は
當山の絶頂なり寶篋印塔を建る是北斗星の所なり泰澄法師此所に登て修
法の時石上に坐して虚空に鉢を投ら〻に忽鉢霊中に飛施物の米穀を入て大に
帰る泰澄入寂の後鉢を此山に埋て空鉢峰と名けし 世の変の時鳴動ス此所
當山東北山脇を役行者泰澄の二師密法修行の霊嶽なり 和州金峯山に準ず 登山の事此所に巡

行場なり 俗に多輪東覗行道石千手滝一の滝を五光滝二の滝と
巖を穿て流れ落る滝旭に映して光彩あり 降三世滝
仙人窟 石塔岩 舎利石
黒白岩 安住岩 天狗岩
加持水 馬足洗水 苔生岩
岩頭に手跡あり 柳世山に柳の高山あり 元弘元年九月後醍醐天皇笠置の城没落の時此所まで逃のびたまひし
中ふも比叡愛宕石の山頂高く聳て方丈の方には琵琶湖の漫々たる水面
雲に連なる三上嶽の翠巒を旭に鮮なり方丈の方を志賀生
駒金剛山葛城山を西海の海原無庫の洲崎湾湾に見れ
あらしを摩耶六甲山の高根も此山頂より一眼の中に遮りて雙眸
の客となりぬ衆山に秀て巖頭嶮々として樵夫も絶て岩ゝ
老杉繁茂しくらき白日も埋んで闇し李白が大峨の吟に五嶽を
天台の四萬八千丈もさらん相對ス

鐘懸 胎内潜 登岩
佛岩 水晶山 熊倉
亀石 堺率瀧 老瀧

百丈石
文殊石

百丈山大智寺
方丈
佛殿
温舟村

百丈山大智寺を和束郷湯舟と奥小杉村とあり　鷲峰山のふもと郷口より山田谷越湯舟
禅師ふ〜て江州山上　岡山大觀禅師譚ハ理有字ハ大有奥州金家のよりり出誕
永源寺ふ屬を　みなれ四里餘ふ〜ふ〜ハ黒ふ〜
とり不言ふ〜六載ゐて始て語て曰われ是良辨ハ父母大ニ喜ふ生ル
と形を学ふり諸の知識ふ渇して經論ハ曉し壯年の時近別中賀ふ住し常ニ
和州安倍文殊ハ尊信し条清ハ志願を企ハ湯舟村ハ出るハ抽木の聳君の
家ニ入て茶ハ喫して憩ふ〜ハのこの日當山ニ水の住境ありと告る師則栢
實一斗ハ推乃てこの山ニ登り巖上ニ坐禪をなす一千日ありなる時側の巖ハ二ニ
こけて文殊菩薩出現し空中ニ在ってこの暫ふ〜こ去師大ニ歡喜して岩頭
をとり殘排のまゝ斗ハ通ニ時ハ〜て世ハ出る事数千年して林と形ハ今
小杉村の樞木ふ〜されて其後ハ所ニ宇ハ建立して文殊の像ハ安し
百丈山大智寺と號を本願を山名ハ伯耆守なり　岡山を明徳二年十二月
大觀禅師と稱ふ　当ニ世ハ大機禅師ふ中興　如雪文巖
和尚ふ〜東福門院ハ帰依あって佛殿再建し
十六日化を四十歳勅諡を
佛殿の本尊釋迦佛を安阿弥の作なり方丈ニ文殊の像ふ後水尾院の牌を安置

坐禪石　方丈の西ニ十間横幅二十間頂上の平方十間ありあり高さ十間ハ
文殊岩　岩面壁ゐ禪師一千日坐禪ふ所と岩面白色ゐて布を
あり　布引石　如くあり
飛大龍ニ
仰ぐ

久世鷺坂　宇治田原の西ニ山所をいみ〜の大和街道ゐて久世村を
慶長紀ハ田の南ニあり
白鷺ハ鷺坂山の松ゐけふやゐるゐ夜も更ニなり　人麿
家集　鄭躅ハ久世ニ

今日そみるけ鷺坂山の白ハ〜じいそ佐保姫染おし〜ん　源三位頼政

椎尾山光明寺を長池の南紀ゐる寺村ニあり本尊十一面観世音釋迦基大士の仏ニ
山寺ふ紀ゐる堂と称ふ故ニ村の名ハ山辺より宇治田原ニ越る
道のりゐ〜ニあり其所ハ椎尾山と云ふ
由日ハ社ハ観音堂の南ゐ〜て東の山本ふあり
敗ふ〜ぬし曽の家し村人ハ〜ひ〜ゐて家ニ納し所を祟あり故ニ外敵ハ遠ゐ
山所の敵ハ社ハ九月三日ゐ　山所大和街ゐの驛ゐして人家多し秀吉ハ〜ゐ古ハ〜ゐ
玉水里ハ長池の南一里余ゐ　山所大和街ゐの驛ゐして人家多し秀吉ハ〜ゐ古ハ〜ゐ
玉水井を里の小道ハ傍ふあり。　水山井ハ里の名ゐ
山吹を咲うて娃を水の底　慶貫

玉水
井堤左大臣旧跡
玉井寺
天満宮
玉水
玉水社里

井堤山
毘沙門
蛙塚
玉井
井堤左大臣の旧地
石頭村
井出の里
玉川

玉井寺を井堤里北中水を村まり宗旨は真言律にて本尊は聖観世音

同基を覺音阿闍梨ゆり座中山玉井姫塚あり
伊勢物語 むし〳〵男ちかくとあやまれる人〳〵

山塚のなかくの玉のをみなえしたのしのひもとなる世成ろう

延喜十三年亭子院御合者
豆曳れとつたの花ぬよりり井えよのうげいかやるこん　長風
新古今

井堤里を玉水北宿のをのこ〳〵井堤北大橋諸兄公の関所を山里の南ゆ石垣
村ゆこのり山所の和の上村の山和ふあり岩北松中隠はむ〳〵の泉みれ
ゆみして今八田の宮とゆりぬ昔紅の藤ゆりて其殖苗今山地ゆあり井
ゆの堤をさらへ恨りて急ゆ〳〵黒さやうゆ人形いて大きにもあ〳〵ぼよの
見れ堤のやうよ踊りあり〳〵くるも伊〳〵ぼ常ゆ水ゆれを使て夜ゆるゆ〳〵ぼれ
さらいみじうゆも清て物哀なる奪ゆそうん侍りける　光名抄
後撰　意取

かくれぬゆ思ひ〳〵ひめる我身ゆ和井ゆれ堤と成やさるはし　忠房

玉川（名井堤川ともゆ）六玉川の其一なり　水上八井堤里北東二里ばかり和束ゆ所より流れて井ゆ北面
流る玉水里北西へ流れ木津川ゆ落入る　大和名所記

愛ひて玉川の汀ゆ除

ゆく植さ世のひとる　今其所の御溝裏ゆ
花の盛みゆ芳金北堤ゆ〳〵北さいとたらんやうゆそ他所ゆ北れて侍りと　光名抄
吉今　意取

山吹をあやゆ〳〵ゆ我ゆ北れんどうゆん君ゆあ〳〵ひとゆ〳〵ゆ

延五抄曰山吹の花北ゆ諸兄の大臣おゆ〳〵山塚の井ゆの寺光明寺を建立して山水ゆ流ゆ〳〵ゆ
其時高向の麻留大臣山吹を植て玉水其間に植り玉水北東ゆ今北井堤北玉水其間に植り玉水

同

かくれゆ形くゆ北れ山吹ゆ〳〵ゆ花のさかりにあんゆ〳〵和歌

これゆおいあるゆ人のいとくゆ〳〵ゆ花のきよ〳〵ゆ〳〵ゆ北ゆ橘諸兄公の男ゆ
色葉集曰井堤の山吹〳〵ゆ橘諸兄井堤寺ゆ造りて金堂四面の回廊のめぐりに山吹
とうゆて廊の〳〵ゆ水流ゆて花をさかせゆ〳〵ゆ供養の日ゆ〳〵ゆ
後撰云井堤ゆ身ゆ〳〵ゆ北れたゆの〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
又雅清抄曰諸兄公の宴ゆ八我一ゆの〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
〳〵ゆて見せんとぞ

新古

駒〳〵ゆて北水ゆ〳〵ゆ歌ゆの花北ゆ〳〵ゆ井ゆの玉川　信成

雲集

玉川のきよ〳〵の山吹ゆ〳〵ゆ色ゆる波ゆ〳〵ゆ　信島羽院

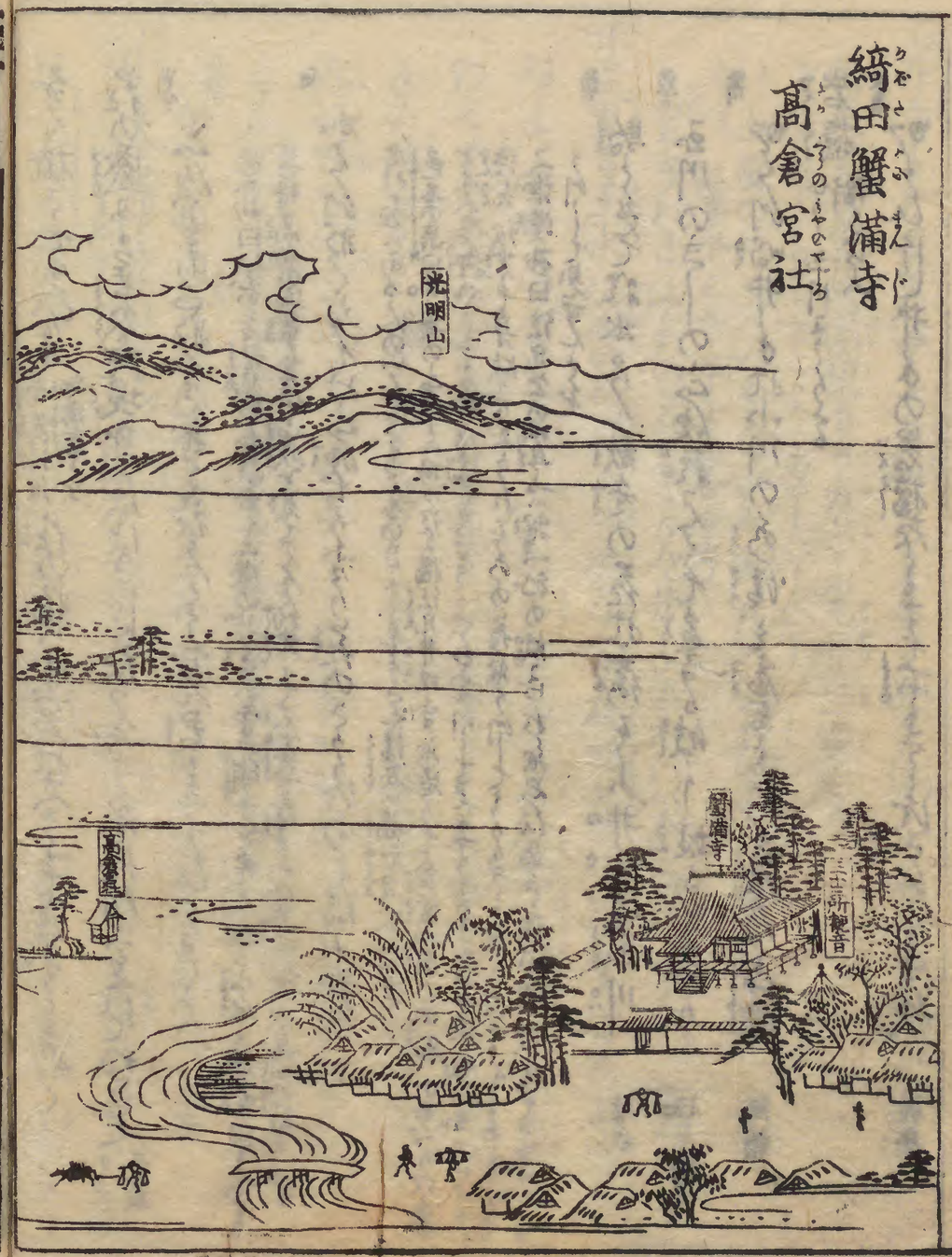
同

〳〵ゆ〳〵ゆ井ゆ北れ小川のゆ清ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

岩橋〳〵ゆ玉川ゆ〳〵ゆ　師頼

家集

〳〵ゆ〳〵ゆ井ゆの岩橋ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ山吹　俊季


綺田蟹蒲寺
高倉宮社
光明山
高倉宮
蟹蒲寺
三十三所観音

地獄谷
綺原社

井堤の玉川は
名所六ッ玉川の
其一ッ也
たゞ人臣諸兄
此河の辺ふ茶蘼
やほく植のひ
ゝろ八重〳〵を
咲みだれ水面
ふ映して金盞を
つ〳〵〇〳〵ふ
あんとくらく

拾玉集

井堤の河風
吹ぬれば
こゝろもとゝ
るひく
山吹の花

慈鎮

玉葉

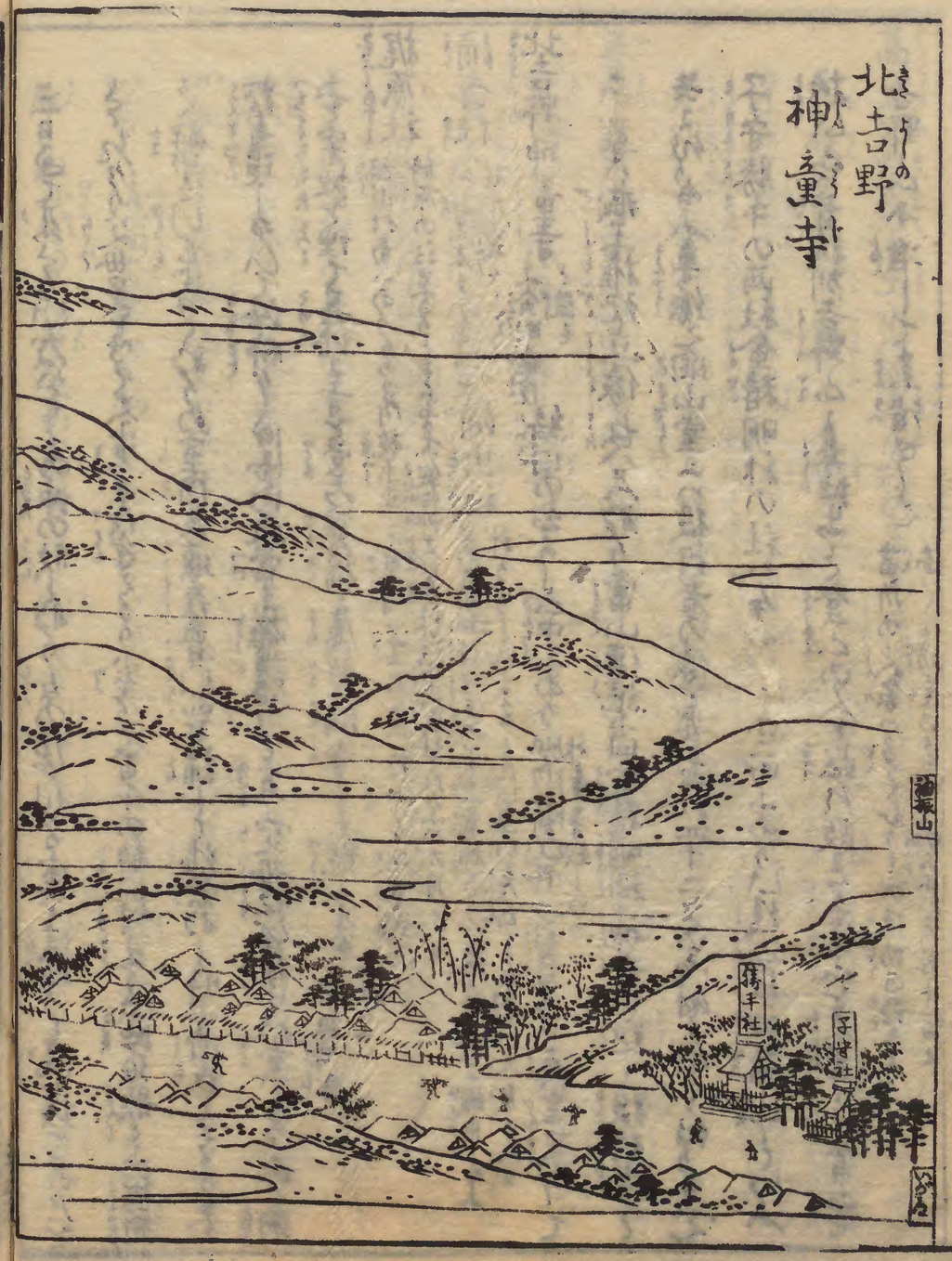
いとゝ
手ての下ゆ
ゆめ〳〵
あよせ〳〵
玉河の水

後成

高倉宮亜亜廟を玉水社南鳥居村のホとあり後白川院寿二の皇子茂仁親王と治三年高倉
宮殿おしゆ高倉宮と称し平家物語曰宮ハ南都へ落セ給ふ人々と混甲四五百騎鞍
の人所と光明山の鳥居社前を過つゝ宮のたの所側後ニ立れハ所馬より高さ七尺ハ何ニ
光明山寺四名多居村の南綺田の北獄谷綺田のホ
普門山鱸満寺ハ綺田村ホあり真言宗ホ属して本尊ハ釋迦仏を安し紫銅坐像当寺傳
記ホ曰むかし山郷人常ホ至善ホ仕て佛法ニ帰し年あり女子人をもうけ初ハ
普門品を誦して毎朝一日田面ホ遊びしが村人蟹を取て殺さんとしけるを
哭て放ん事を願ひ其ヲ耕せんと生るを蛇の墓を吞てあるを放ん事を願ひ
さりとて其ハ其の子ハ其墓を放ちゆくハ我女を嫁して聟ホとらんと云ハ
蛇ハ聞て吞て墓を吐出し数の中へ這入ぬ家ホ帰て悔く死ぬ
甲斐なし其夜初更の比綺田の人夢ホ今朝の約束ホ忘て系りしを
いとく後間ハ其ひてのちつゝ忘るゝ今ハ自を注て多くひろれハ別
帰りぬ此ハ女の室をつく閉て普門品を誦して居ける所ニ居ける人

三日ゐて来ると云なりとの故の形ハ女の居しる室を這巡りて尾を以て其戸を
そなりの父母是を聞て大ホ形る夜ハ来ると小至て百千の蟹群来て此所ホ散ホ狼斬
く鱸ホ切ホ来る事ハ室内ホ通夜普門品を誦して他念ハ時ホ所長ハ
現ハ有ひて海神ハ此ハ常ホ擁護せ宮父母牧び種ホ女ホ生ハ
去を穿地を埋て其地ハ当を宮ホ冥福を薦蟹満寺と号す一名紙幡寺
梶原社綺田村ホあり所梶ホ平ニ景時の霊ホ一説ハ延喜式の
綺原の社是ハ健伊那大比賣神ハ九月三日
涌の杜杜大木多くありて涌出社ホ所和佐坐天乃夫支賣神ハ一説ニ一夜ニ涌出
北吾野神童寺金剛瘋院綺田の西ホ所伊別上所の往還路ホ真言宗ホ
本尊ハ藏王権現立像長八尺ホ当山傳記ホ曰金精明神神童ハ役行者ハ
共ニ仏ホ尊像ニ開山堂ホハ役行者の像を安し四十二文の所ハ
子守勝手の両社金精明神の社ハ本堂の東ニ町ホあり山後ハ神振ハ
祈ハ昔和州吾野ハ毒地生ハ登山の人を悩ハ故ニ堂置ハ峯ハ当を
吾野ハ准て系清せ当所の人家ハ多くむ此ハ坊の法
坊金のあり例祭ハ三月十一日ニ

北吉野
神童寺



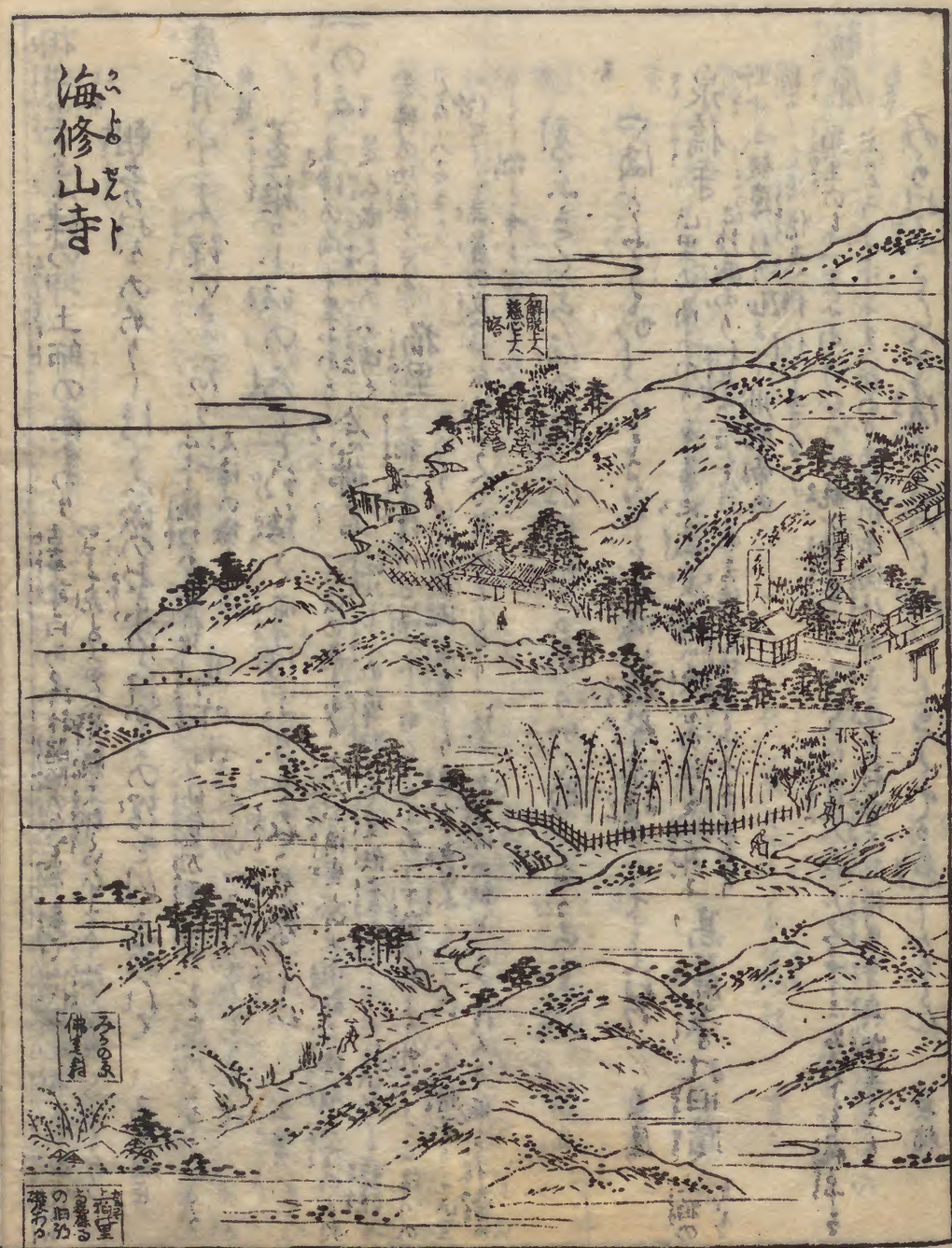
薪
洲恩菴
天神森
天神宮

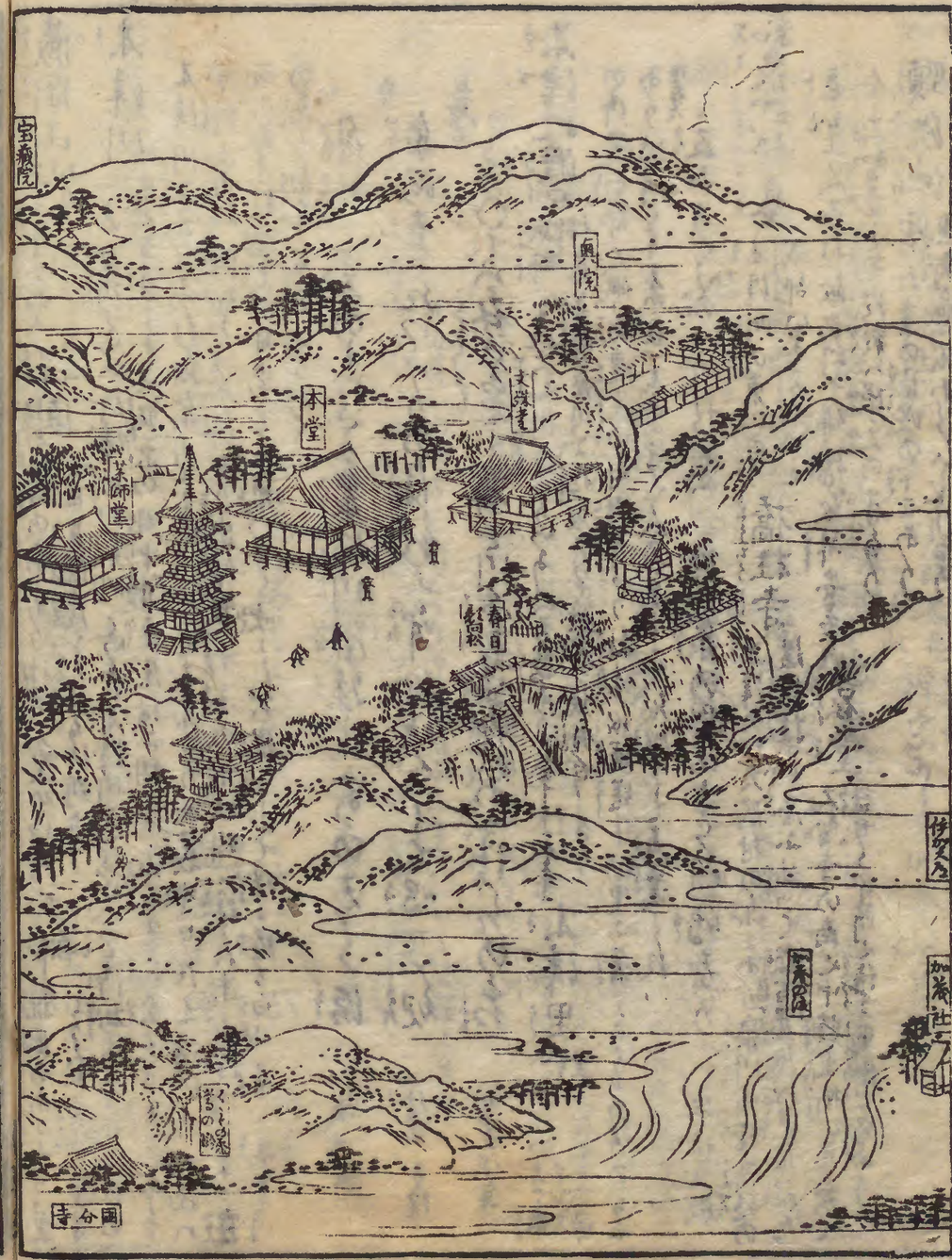
国立公文書館
National Archives of Japan

妙勝寺は本津川より西新村にあり　酬恩菴　禅宗にして開基は大應國師正應年中
に創し又一体和尚康正の比に再興と佛殿あり釋迦佛を安置す開山堂に
大應國師の像を安置す一方丈に一体和尚の筆を安置
酬恩菴の額　方丈に掲る　一体の筆　一体の塔あり遺骨祝禱す常に携へし笠杖あり
方丈の庭に佐川田八幡宮當寺の西一町とりあり所の地主神
喜古の好む所なり　佐川田喜古の旧居あり　又儀式山人の古墳あり
神南備山　薪村の西にあり峯に天神杜　薪村の南　天神宮　天神杜の西の堺にあり所を
水晶石あり　天神杜の隣
天満天神社　山里の長流神　普賢寺溪　天神の杜の巽にあり河列
祀り祭る九月十一日　数方へ出る石あり
綴喜郡　普賢寺溪の巽にあり方二町とりあり南に山里原　和名抄に泉を
皇居祝還これし所なり　郡谷と山里原　和名抄に泉を
長屋もろもろの人と神をとる　橋はたのしたの下道　後鳥羽院
長月のはつかれ京の秋をまつ　やのそまつ　行家
やのそまつ　郡谷の里ふるき名所　段々良不動堂　郡谷の山上にあり
段々良不動堂　郡谷の山上にあり　大御堂　たちの村の西にあり在る十一面観音安置
弘法大師の作　寺号は普賢寺　そのふもとに阿弥陀佛　春日社
牛頭天王社　普賢寺谷の山上にあり　若王寺　下狛にあり在る阿弥陀佛　若王寺社
氏神　延喜式八月十八日　若王寺社本堂の前

藏國山　若王寺の西に　祝園　下狛の南にあり　武天皇の作時　土師　祝園の南にあり山里
逆臣長髓彦を誅ぬ所なり
木津川　一名泉川　河海抄曰泉川　弘法大師の作　大和の杜の
本津川と義もとれり泉川ともいふ　古歌に泉川と　木津川の水源は
伊賀山田郡阿知と山里の所より出伊賀　牧の郷中井平尾村に川あり　氷上と和束より流れて来る
雨ふれば晴天の日あれども東風つよく吹くに水出る　木津川の水源は
の風に白布　泉川　泉川の川風涼しあの山の清流　後嵯峨
月毛も夏のよりてる泉河の川風涼しあの山の清流　後宇多院
泉河を流れてくるの月毛　月毛の舞ふ　後宇多院
かさ〇てい夜〇をしいづる川ぐるまの夜れあらはれの月　光堂
木津の渡口　京師　大和街道　行基菩薩泉川を掘り　供養修造
の佛宇治都大佛殿建立の時国々より材木運送し山里に着しより木津の名
あり此所より京良へ三里　人家多し布瀑して孝業なり
夏ちかく瀑ふるしの山城の泉の里ふるの川風あり　従一位良教
和泉式部墓　本津町の東にあり　橋柱寺　本津の内大塚村のほとりあり泉川の橋断絶の
式部山里より西へ　後橋柱　水底に沈むて数百年後に掘出る所なり
柱寺　今大智寺と号に家に居えの寺あり　仏像弁安置
頭洗池　ほとれ堂の長堤の下にあり　大智寺の南の中将重衡の所にあり
重衡の頸洗池あり　哀堂　詠せられ所に儀式重衡の墓あり

海修山寺





国立公文書館
National Archives of Japan

相楽里を木津の坤土師の南にあり 事記に白あり仲哀の白を鄙に悲て山代國相楽に至り樹の枝に

万葉

朝雀れかのめりしたく山城のわらの山ぬまの塔をいつもあれて　高橋朝臣

鹿背山を木津の東にあり 上に城行あり 木津の城くつ　馬咋山　仙覚万葉抄に泉川こるくらく

後撰

岩雄が小坂の名を行後くに雪降ふるこの新しい山　公實

一の坂 木津の南半里にあり 念佛石 一の坂の南にあり土人法講座といふ南都大佛殿再建の

是山城大和の国境 法然上人の導師を堂供養あり

念佛の功徳をらあ　狛里 上狛は木津川を隔て十町ばかり下狛は所より乾して木津川の

ふ仏せ　高麗の文字 狛こ人て所の名をやり一坂五百渡の船と　まこ人の僧名り山里

百　狛　呼　拾

岩ふきくこの海の波の瓜絡りの瓜絡りの瓜絡りの瓜絡り　朝光

新拾

やはらかくもかくもこの人をとこ城れ狛野ふ　恵慶

泉橋寺 山里の南にあり本尊地蔵菩薩像の仏の外に 高麗寺 旧蹟 上狛の

里中に礎遺あり 行基の紀 平記 古津の石仏 飛鳥の

勅して唐僧恵雅住しまうり 用明帝の

執原 狛里の東一里にあり 執を埋 恵雅恵雲 高麗より恵雅恵雲

名名して中ふまねあり 西村に東国 侍井玉尾東村 登大路 佛生寺 奥畑等

みのれふるこそ深くいろこそ色しくるん　恵補

主

ことれをさくやふけれこのてくまの川の渡りも今さらし　光俊

柞の杜 執原の郷中西村にあり 嘗の滝 西村の入口 衣の滝 は所に 真田川 西村東方の

西のふ紙柞ことふ　あり　たるあり

後撰

そそ山岑れあるれ風をくみる云れ葉をのこそ集れ　貫之

後拾

いつれこ時ふ時ふ葉を柞の杜の落くるるん　俊川左金

新撰

時ふ時ふ人を思ふ心川柞のりふ吹くし　定家

国分寺 は郷河原村にあり本尊阿弥陀佛聖武帝の勅願 菜切石 は郷井平尾村にあり弘法大師

用基の紀基の士 日本國無ふ寺と建て四天王寺と号 野草とれ初めてしあり

海住山寺 執原郷佛生寺村の山上にあり 坂道町あり 豊大路 當寺は聖武天皇の勅

願所にして中興を解脱上人 又解脱の上足義仏上人も より豊る道あり

十一面観音脇士地蔵菩薩 安倍三重塔 招提寺の開祖鑑真和尚漢土より將来 宗旨真言にして本尊を

本尊 文殊堂 本尊十一面観音脇士文殊菩薩 役行者の像と安倍 聖武帝ふ敬ふ 佛舎利 弘

奥院 本尊十一面観音 解脱上人 新向松 義日 大明神 松ふ新向しく 解脱上人を慕ふ人所より

安倍氏の南の堂ふ月明の窓あり 所より義日明神新向 解脱上人ふ渇しめ

解脱上人塔 慈心上人塔 本堂より一町より

井手寺 義心上人耕作の名井手寺 十六人を撰び里接の基礎 真支院 今こ絶じて

里ふ住持しき十六人あり 常ふ水飯を辛七早魃の都 ふ井手寺と号

鹿路山
千手の滝
本堂
陰陽石
天保元年

笠置寺
観音谷
比笠置
天保元年

恭仁の都は旧地は瓶原の西鹿背山のかなたに
始て官城を造り帝行幸しぬ賀世山の西の道なり
左京より西を右京とせり　聖武帝天平十二年十二月
諸兄乙巳の日行幸田せる其法
続日本紀
新勅
ふるのゝ久迹の都をあれはてゝ
新拾
吹風ぬむかしをのこそ思ふ　陳人定氏
新続古今
泉のいつみのそこ絶てくふの都もあれにしめるん　兼氏
流れ園を瓶原の西加茂の渡れるこゝろ
聖武帝天平十年僧都大佛殿建立の時伊賀より材木を組て
砕散て通路閉く故こゝ多くの材木を組て安らゝ流し其ゝ所と流の園こゝ又二つの岩
泉川と流て岩石の中かゝつて通路の所
山の下を流て今飯園こゝ人　土御門院
加茂のやしろ瓶原より暗村に至る道の傍ふあり　加茂郷を去る三十町
暗川　泉川の別名なり　清見川原暗の渡ふ至る　古社あり
瓶原の西より陸　泉川の西より陸
布當山　一隅山
石集
姫こゝ山ゆきまること見れば百代もかるべき渡大宮所　清人定氏
旧
古郷を遠くもわすれぬ人と紙る我うゝ仮寝せし　高岡河内連

鹿路山笠置寺は木津川の河上笠置の山上ふあり　麓ふ民家多し川坂傍て両村あり
注　南笠置北笠置とこゝ
五月雨ふるあしまちるかつらの川のこゝろはやけれども　後嵯
當山坂笠置と號るは往昔天武天皇此ふ遊猟しぬ所奈良ひしし
駿馬巌ふ勝坂屈して動ぜ天皇危急ふ陥て三寶坂禮し安泰坂得こ
ゆゑに此ふみ佛閣坂造営とゝ祈誓しぬ既ふ感應あるて奈良遷り
進む故ふ其證こゝて着御の蓋笠坂ふて遺し還幸しぬ逆ふ佛閣坂
建立あるて笠置寺と號しぬひぬ　藤原坂八町あり
本堂ふ弥勒佛坂本尊こゝ　自然石ふ　宗貞ハ長言ふて新義之
三月堂あり當山回縁の後ふ南都東大寺
於て二月三月の修法あるあり　護摩堂　坂正月堂と号しぬ　春三面
弥勒石　天武帝此山坂ふ坂ふ　月の間天下安今の修法あり　二月堂
高さ二間横四間こゝ回縁の四石面焦て佛像明こゝ
薬師石　高十間余　文殊石　高八間こゝ石面ふ
横四間こゝ　横四間こゝ
千手崛　良弁僧都ふ多て行法　胎内挑　奥の院ふ北ふ
所こゝ笠置崛こゝ　良弁坂所ふおゝて
楠書判石　楠正成石面ふ書判坂　護摩壇跡　祈禱あり

漢人絶法の甘鼎の作 榎本神 當山の鐘樓 解脱上人 冥土より隠浮檀金紙取
銘二曰 笠置山般若臺建久七年丙辰八月十五日 般若臺 後楠の西ふあり 解脱
大和尚南無阿弥陀佛 上人と云日明神と
紙面の解脱上人 塔八町くらゐ東にあり溪を隔て千手瀧 石正童子瀧 金剛
所なり 童子瀧 山のむこうにあり 後醍醐帝の皇居なる當山の嶺にて本丸二の丸
溪川のうへにあり
の名所 石糸勒石の上の平地なり 楠正成もこゝにて始て所味方をこゝ陶山
小見山 夜話せし所 山の背にて小の方にあり 数百丈の巖石そびえて
鳥も翔がたく古松枝を垂蒼苔露なり 麓あい泉川を帯て白浪巖を砕
く勢あり 水流の委曲蜿蜒 山列美一の勝地なり 千巖秀て競ひ萬
壑流汲争へり 水の声とゝひつゝ

栗栖天神宮 笠置山の麓人家の西にあり所い天満天神と見笠置寺の守護神
飛鳥路 笠置の小十余町にあり 南山小路 所の氏神 九月二日
夜詣せし 今に至て笠置の里に賑ふ
大河原 有市 飛鳥路の北にあり 有市
伊賀等の國境なり 所山城大和 細い泉川の岸にあり

恵教院

国立公文書館
National Archives of Japan